

芦辺町文化財調査報告書第6集

はる つじ
原の辻遺跡

—災害復旧工事に伴う緊急発掘調査—

1993

長崎県芦辺町教育委員会

芦辺町文化財調査報告書第6集

はる つじ
原の辻遺跡

—災害復旧工事に伴う緊急発掘調査—



序 文

芦辺町には、深江地区に諫早平野に次ぐ平野があり、古くから稻作が行われていました。この平野の周辺には、原の辻遺跡をはじめ多くの弥生時代遺跡が点在します。また、平野北側の大塚山（標高74m）の頂上に県指定史跡の県下でも古い5世紀後半ごろの「大塚山古墳」、その麓に「安国寺」があり、歴史的な地域として注目を集めています。

原の辻遺跡は大正15年、松本友雄氏により紹介されて以来、昭和14年鶴田忠正氏、昭和27・28年水野清一・岡崎敬氏、昭和49～52年にかけて長崎県教育委員会による範囲確認調査が実施され、原の辻遺跡の全貌が徐々に明らかになりつつあります。

今回の調査報告書は、平成元年9月の大雨、および平成3年9月の台風により、水田の法面が崩壊したため、災害復旧工事に伴う緊急発掘調査を実施したものです。

その結果、弥生時代中期から後期にかけての土器片が多数出土し、また、2本のV字溝が確認されました。

今回の調査では、台地の周辺部にもかかわらず多量の土器が出土しており、原の辻遺跡の広大さをうかがうことができます。

本調査および報告書の発刊にあたり、全面的に指導協力をいただいた長崎県教育文化課に深甚の謝意を表するとともに、土地所有者3名の方々の協力に対し厚くお礼申し上げ、発刊の旨葉といたします。

平成5年3月

芦辺町教育委員会

教育長 野 元 茂 生

例　　言

1. 本書は佐岐郡芦辺町・石田町に所在する、災害復旧に伴う原の辻遺跡緊急発掘調査報告書である。

2. 調査の事業は芦辺町教育委員会が主体となり、調査担当は県教育委員会文化課が行った。

3. 調査期間は平成2年2月5日～2月10日、平成4年3月16日～3月31日、同5月11日～5月13日に実施した。それぞれの調査地点を順に第1～3地点とした。

4. 調査関係者

事業主体 芦辺町教育委員会

教育長野元茂生（平成2年～）

教育次長長嶋邦昭（平成2年～）

社会教育主事浦川巧（平成2年～）

社会教育指導員吉田貞光（平成4年～）

調査担当 長崎県教育庁文化課

係長安楽勉（平成2年2月）

文化財保護主事本田秀樹（平成4年5月）

文化財調査員小野ゆかり（平成2年2月）

文化財調査員下田章吾（平成4年3月）

5. 調査中の写真撮影は、各調査担当者で行い、遺物の撮影は下田が行った。

6. 本書は各調査担当者が分担執筆した。執筆者は次のとおりである。

I…………安楽勉

II…………下田章吾

III-1……安楽勉

III-2……下田章吾

III-3……本田秀樹

IV…………下田章吾

7. 本書の編集は下田が行った。

本文目次

I 調査に至る経過.....	1
1.はじめに.....	1
2.第1地点.....	1
3.第2地点.....	1
4.第3地点.....	2
II 地理的歴史的環境.....	3
III 調査.....	6
1.第1地点.....	6
(1)土層.....	6
(2)遺物.....	7
(3)小結.....	29
2.第2地点.....	30
(1)土層.....	30
(2)遺構.....	31
(3)遺物.....	35
(4)小結.....	48
3.第3地点.....	49
(1)土層.....	49
IV 総括.....	51

表目次

表1 遺跡地名表.....	4
---------------	---

挿図目次

第1図 調査地点配置図	2
第2図 周辺遺跡分布図	5
第3図 調査区域図	6
第4図 土層実測図	7
第5図 出土遺物(1)	9
第6図 出土遺物(2)	10
第7図 出土遺物(3)	11
第8図 出土遺物(4)	12
第9図 出土遺物(5)	13
第10図 出土遺物(6)	14
第11図 出土遺物(7)	15
第12図 出土遺物(8)	17
第13図 出土遺物(9)	18
第14図 出土遺物(10)	20
第15図 出土遺物(11)	21
第16図 出土遺物(12)	23
第17図 出土遺物(13)	24
第18図 出土遺物(14)	25
第19図 出土遺物(15)	26
第20図 出土遺物(16)	28
第21図 調査区域図	30
第22図 土層図及び遺構実測図	33~34
第23図 第3層出土遺物(1)	36
第24図 第3層出土遺物(2)	37
第25図 2号溝出土遺物(1)	39
第26図 2号溝出土遺物(2)	40
第27図 2号溝出土遺物(3)	41
第28図 2号溝出土遺物(4)	42
第29図 3号溝出土遺物(1)	44
第30図 3号溝出土遺物(2)	45
第31図 3号溝出土遺物(3)	46

第32図	3号溝出土遺物(4).....	47
第33図	その他の出土遺物.....	48
第34図	調査区域図.....	49
第35図	土層実測図.....	50

図 版 目 次

図版1	遺跡空中写真・遺跡遠景.....	55
図版2	第1地点遺跡遠景・近景.....	56
図版3	第1地点調査風景・遺物出土状況.....	57
図版4	第1地点崩落の状況・南側土層.....	58
図版5	第1地点遺物出土状況.....	59
図版6	第1地点出土遺物(1).....	60
図版7	第1地点出土遺物(2).....	61
図版8	第1地点出土遺物(3).....	62
図版9	第1地点出土遺物(4).....	63
図版10	第1地点出土遺物(5).....	64
図版11	第1地点出土遺物(6).....	65
図版12	第1地点出土遺物(7).....	66
図版13	第1地点出土遺物(8).....	67
図版14	第1地点出土遺物(9).....	68
図版15	第2地点近景・調査風景.....	69
図版16	第2地点南側土層・北側土層.....	70
図版17	第2地点2号溝遺物出土状況・3号溝遺物出土状況.....	71
図版18	第2地点出土遺物(1).....	72
図版19	第2地点出土遺物(2).....	73
図版20	第2地点出土遺物(3).....	74
図版21	第2地点出土遺物(4).....	75
図版22	第2地点出土遺物(5).....	76
図版23	第2地点出土遺物(6).....	77
図版24	第3地点近景・調査風景・北側土層.....	78

I 調査に至る経緯

1. はじめに

原の辻遺跡は、弥生時代の大規模な遺跡として大正時代以来注目されてきた。松本友雄氏は大正15年「巣路考古録—第1編—」の中で各種遺物を紹介している。さらに昭和14年、幹線道路工事、及び耕地整理に際して出土した多数の遺物と包含層について、当時県立巣路中学校に在職中の鶴田忠正氏が注目し、その成果を昭和19年発表されている。昭和23~26年にかけては、東亜考古学会による調査が数回実施され、多量の土器・石器・金属器・骨角器・貨泉などが出土し、重要な遺跡であることが認識されてきた。

また近年は島内における諸開発工事が進む中で、遺跡の保護も急務となり県教育委員会では昭和50年以来4次にわたる範囲確認調査を実施している。その結果、芦辺町と石田町にまたがる台地全域から墓地や環濠、生活跡が検出され、『魏志倭人伝』に云われる「一支国」の中心地的役割を果たしていたと推定される。

2. 第1地点

今次調査の原因は、平成元年9月農業基盤整備事業に伴う分布調査の際、原の辻遺跡をのせる台地の突端に近い、北東部の水田法面が崩壊しているとの報告を受けたのに端を発している。県文化課職員が現場に急行すると、約2.5mの高さと幅約10mにわたって土砂が落ちており、露出した断面には多くの遺物が見られ、崩壊の中にも多くの遺物が認められた。

担当課と協議の結果、崩壊した部分は災害復旧として擁壁工事を行うため、包含層も工事削平する説明を受けた。従って埋蔵文化財に影響を及ぼす部分について緊急発掘調査を実施するに至ったものである。

3. 第2地点

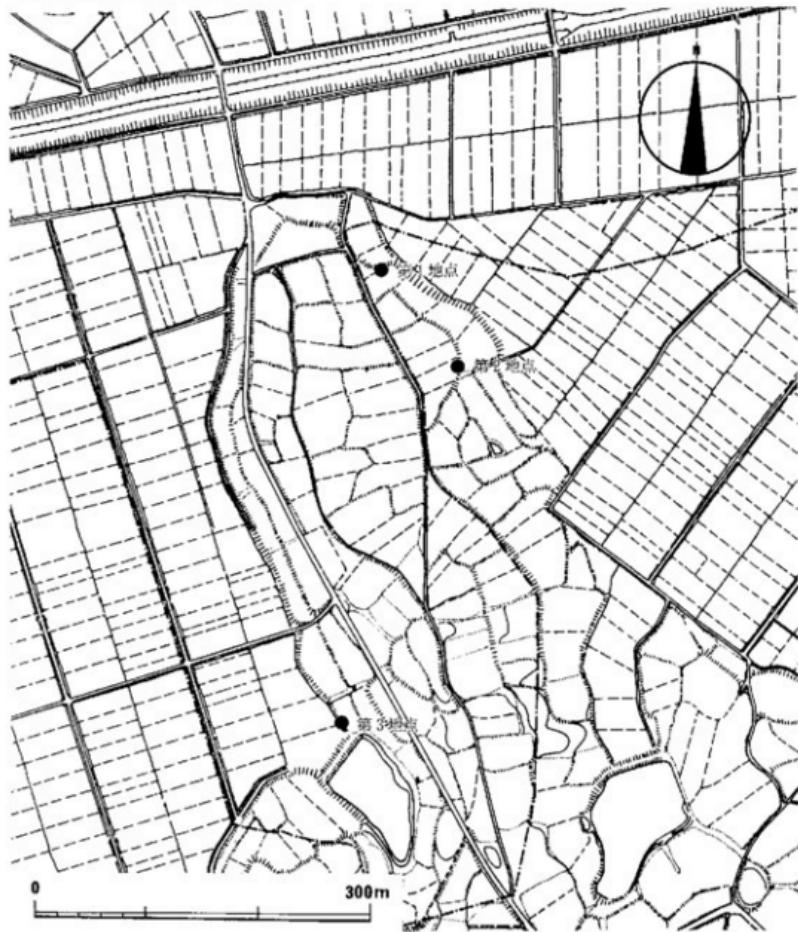
平成3年9月の台風19号は、各地に大きな被害をもたらした。巣路島もその類にもれず、崖崩等の被害を受け、原の辻遺跡をのせる台地でも2箇所、水田法面の崩壊を確認した。このうち深江池に近い南西側の斜面では、幅約14mにわたって土砂が崩れており、露出した断面には包含層が見られた。

担当課と協議の結果、埋蔵文化財に影響を及ぼすことが明らかであるので、復旧工事前に緊急発掘調査を実施するに至ったものである。

4. 第3地点

今次調査の原因は、前回同様台風被害による災害復旧に伴うものである。場所は第1地点近く、幅約9mにわたって土砂が崩れており、露出面に遺物が認められた。

担当課と協議の結果、周辺に遺物が多数散布していることもあり、復旧工事前に緊急発掘調査を実施するに至ったものである。



第1図 調査地点配置図

II 地理的歴史的環境

壱岐・対馬は、朝鮮半島と九州の間に位置し、対馬・韓国釜山間が約60km、壱岐・対馬間約50km、松浦半島・壱岐間約25kmと肉眼で眺望できる距離にあり、古来より大陸文化の中継点として重要な役割を果たしてきた。一方、有事の際は最前線になる可能性をもっており、元寇などの被害を受けたこと、また防人の設置や、壱岐に残る東洋一の砲台跡がそれを物語っている。

壱岐の地形は、東西約15km、南北約17kmの本島と、30余りの付属島からなる。全体としてなだらかな玄武岩台地で、標高の最高地は、岳の辻の213mである。同じ玄海灘に浮かぶ島ながら、「山が険しく、深林多く、獸道のような細い道」しかないと表現された対馬とは対照的である。島の面積は、約138.11km²、約38,000人（平成元年10月）が生活している。

島の分水嶺は西に偏り、幡錦川が東流し、内海に注いでいる。また、この流域には、県下第2位の沖積平野が広がり、諫早平野に次ぐ穀倉地帯を形成している。現在この川の流域は数次の農業基盤整備事業により地形が変わっているが、昭和の初めごろは川が蛇行し、ところどころに沼地があったと伝えられる。また、周辺には玄武岩からなる低い溶岩台地が分布しており、原の辻遺跡をのせる台地もそのひとつである。これらの台地の多くは現在はかなり削られている部分もある。

歴史的には、旧石器時代については原の辻遺跡などで遺物の発見例があり、県が実施した原の辻遺跡範囲確認調査の際、旧石器時代遺物の報告がなされている。また、縄文時代についても、昭和58年の郷ノ浦町名切遺跡の調査例がある。しかし、いずれも当時の様子を語れるほどではない。

弥生時代になると、北部のカラカミ遺跡・南部の原の辻遺跡を中心に遺跡数が増大する。この当時の様子としては、中国の正史『三国志』「魏志東夷伝倭人の条」、いわゆる「魏志倭人伝」に、「対馬より小さいにもかかわらず人口が多く、田畠はあるが食するに足りず、交易を行った」様子が書かれている。また、それを実証するかのように陶質土器・銅鏡片・貨泉等、外来の遺物も出土している。さらに古墳時代になると、島央や北部を中心に高塚古墳が多く分布する。最も古い古墳は5世紀に築かれたもので、県指定史跡の大塚山古墳などがある。6・7世紀になると古墳の数が増加し、中でも群集墳が多く見られる。

8世紀には国分寺建立の詔が發せられ、壱岐にも国分寺が建立されるようになった。しかし財政難からか、從来からある壱岐直の氏寺をこれに充てたとされている。

元寇以後は松浦党諸氏の興亡の後、平戸松浦氏の支配下に入り、明治維新に至る。

No	名 称	所 在 地	種 别	立地	時 代
1	舞触遺跡	芦辺町湯岳舞触	遺物包含地	丘陵	先～古
2	都城遺跡	〃 〃 今坂触	〃	〃	弥・古・中
3	定光寺前遺跡	〃 〃 本村触	〃	平野	弥・古・平・中
4	鶴上山1号墳	〃 本村触明細田河	古 墳	丘陵	古 墳
5	〃 2号墳	〃 〃 迂の木	〃	台地	〃
6	常山2号墳	〃 南触堂山田河	〃	丘陵	〃
7	〃 1号墳	〃	〃	〃	〃
8	〃 3号墳	〃	〃	〃	〃
9	夷原塚跡	石田町湯岳典触字大川・典・古川	遺物包含地	〃	先・弥・古
10	神ノ瀬古墳	〃 池田西触字神ノ瀬	古 墳	〃	古 墳
11	坂本古墳	〃 リ字上池田	〃	〃	〃
12	鶴田遺跡	〃 池田仲触字鶴田	遺物包含地	台地	弥 生
13	深江本村遺跡	芦辺町深江本村触	遺物包含地	山	弥・古・近
14	巻岐国安国寺遺跡	〃 深江栄触	寺 跡	〃	中 世
15	安國寺前遺跡	〃 〃	遺物包含地	台地	弥・古・中
16	大塚山古墳	〃 〃	古 墳	丘陵	古 墳
17	猪鬼塚古墳	〃 深江鶴龜触	〃	〃	〃
18	俵山古墳	〃 リ 俵山	〃	〃	〃
19	俵山新古墳	〃 リ 稲荷神社前	〃	〃	〃
20	ミヤクリ(潤螺)遺跡	〃 リ ミヤクリ	墳 墓	〃	弥 牛
21	玉塚古墳	〃 深江采触玉塚	古 墳	〃	古 墳
22	しめ辻遺跡	〃 深江平触しめの辻	墳 墓	台地	弥 生
23	原の辻貝塚	〃 深江鶴龜触亀原の辻	貝 墓	〃	〃
24	原の辻遺跡	石田町右三西触字大原・大川・高原・柏田・昔の木・原ノ久保	遺物包含地	〃	先・弥
25	柏田古墳	石田町右三東触字柏田	古 墳	丘陵	古 墳
26	平山3号墳	〃 〃 平山	〃	〃	〃
27	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	〃
28	〃 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	〃
29	石田城跡	〃 リ 久保・郡之神神社	城 跡	〃	中 世
30	重山塚	石田町龍城西触字泉	墳 墓	〃	〃
31	久善ノ辻黒壁石原廃地	郷ノ浦町平人触字久善の辻	遺物包含地	〃	〃
32	真弓館跡	石田町池田仲触字真弓	館 跡	〃	中 世
33	伝遠新羅使墓	〃 池田東触字石田峰	墳 墓	〃	奈 良
34	浦山城跡	〃 リ 浦山	城 跡	〃	中 世
35	中尾遺跡	〃 リ 字中尾	遺物包含地	〃	弥・古
36	津の宮遺跡	〃 石田西触字西津の宮	墳 墓	〃	弥 生
37	白水遺跡	〃 リ 白水	遺物包含地	台地	彌・弥
38	小塚原1号墳	〃 石田南触字西ノ久保	古 墳	丘陵	古 墳
39	〃 3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	〃
40	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	〃
41	池田遺跡	〃 石田字浜田	遺物包含地	平地	弥 生
42	志吉岐遺跡	〃 リ 字志吉岐	〃	丘陵	弥・古
43	黒木遺跡	〃 本村触字城ノ辻平地原	城 跡	〃	中 世

第1表 遺跡地名表



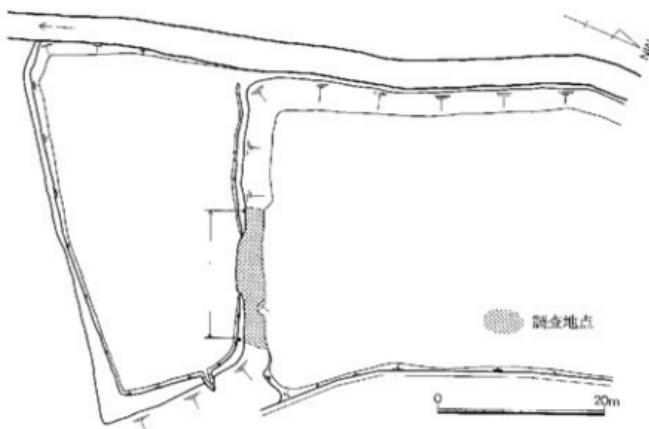
第2図 周辺遺跡分布図

III 調査

1. 第1地点の調査

調査区は、原の辻遺跡をのせる台地の先端より手前の東側縁にあたる水田面標高11.4m部分である。昭和30年代までは「壱州の鏡頭畠」と云われたように、頂部が円くなった畑がほとんどであったが、次々と平坦な水田と化していく。そのため本調査地点の水田も法面を大きく取っており、集中豪雨の際に崩壊したものである。

調査は、崩壊部分の工事対象の東西14m、南北約3mにわたって実施した。先ず崩落土の中にも遺物が含まれていたので、その掘り起こしから始め、多くの遺物が出土したことから大規模な遺跡の広がりを確認することとなった。なお、最近行われた圃場整備に伴う範囲確認調査では低い水田面からも遺物の出土があり、さらに範囲は広がる様相を見せている。



第3図 調査区域図

(1) 土層(第3図)

今回の調査は、崩落した部分を取り除いてそこに埋没している遺物を取り出す作業と、削平される部分の調査が主な目的であるが、奥に大きく崩れている部分については層位を確認した程度である。したがって、中央部ではかなりの傾斜がつく結果となつたが、層位は次のように観察された。

第1層表土層……………耕頭畑を水田化したため、中央部分は削平され周辺は埋められている。そのため西側では浅く、東側で深くなっている。

第2層黒色土層……………有機質を含んだ黒い層で多くの土器を含む。時期は弥生後期が主体である。

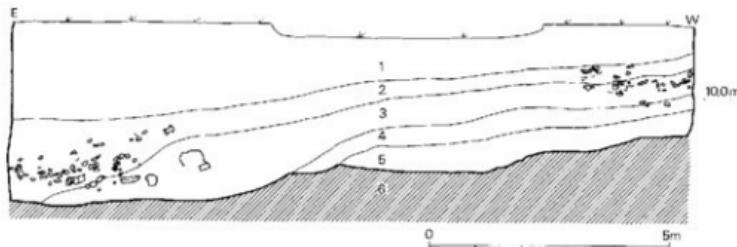
第3層暗褐色粘質土層……………茶色の強い層で弥生中期が主体である。一番東側は現水田面よりも深くなる。

第4層褐色粘質土層……………やや明るい褐色の層で遺物は少なくなるが、中期の層である。

第5層黄褐色土層……………粘質が強く遺物は含まない。

第6層地山層……………表面は青灰色でやわらかく、下に掘り下げるに従って固くなっている。

層全体が西から東へゆるやかに傾斜しており、現地形に沿っている。遺物包含層は北東に位置する低い水田面以下に潜ってしまう。そのため旧地形は現地形より拡がりを見せている。



第4図 土層実測図

(2) 第1地点出土の遺物

遺物の出土状況は、崩壊法面からの出土であり、下段の水田にだんご状に堆積していたため大部分は層位不明のままの取り上げとなつたが、その量はパンコンテナ13箱にも達した。しかし斜面に残された遺物の状況から、上層と下層に分かれて包含層が観察され、前者は弥生後期、後者は弥生前期の遺物が主体であることが判明した。したがって、遺物の分類については概ね、以上の根拠に基づいている。また鉄器の小破片が数点と、シカ・イノシシの骨がわずかに出土したが、本報告には図示していない。

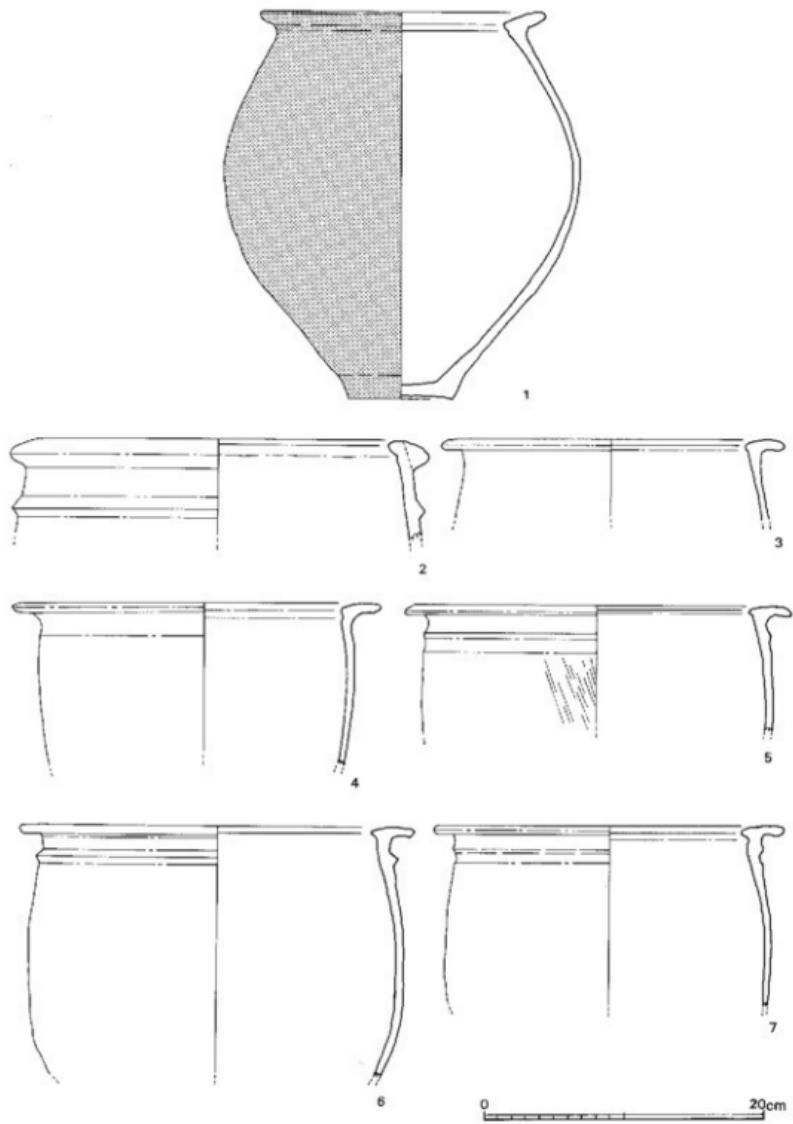
弥生中期の土器

彌形土器

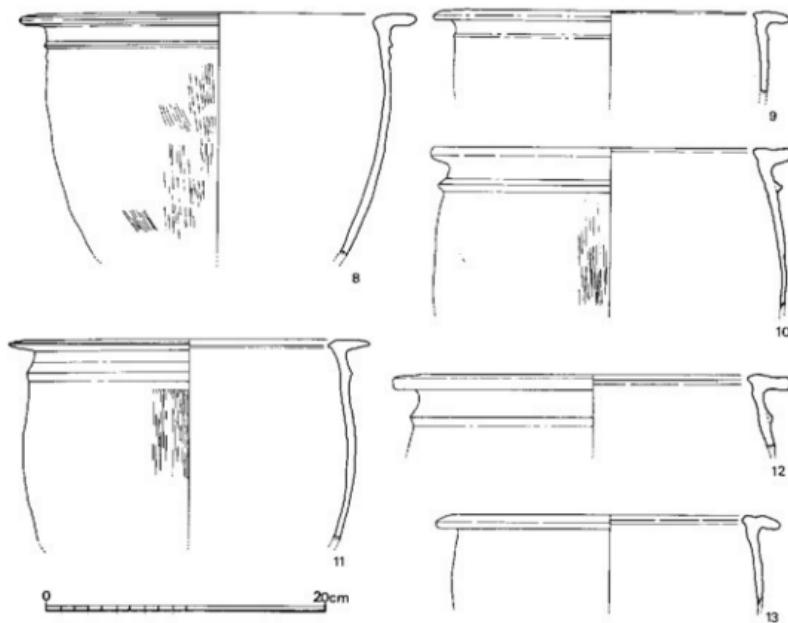
1は頸部がしまった壺形の土器で、口縁部は外から内に斜行する。胴部は球状にふくらみ、底部はわずかに上げ底である。胎土は精選され焼成も良く、全体は赤褐色を呈している。口縁平坦部から底立ち上がり部まで全体に丹が塗られ、丁寧な磨きが施されている。復原口径19.3cm、器高27.7cm。2～13は逆L字形口縁及び突帶文を有する壺である。2は逆L字というより三角形状の断面を有する口縁部で、内側にもつまみ出されている。外側には口縁部直下に断面三角形の貼付け突帶が行く。胎土には茶・白色の砂粒が混じり褐色で焼成は良好。今次調査では古期に属する。3・4は貼付け突帶を有しない土器であるが、口縁部に若干の相違が認められる。3の口縁部端が下に向いているのに対し、4の口縁は上向きで、端部はやや尖り気味におさめられている。頸部もしまり弱い稜線をもつ。色調は前者が褐色なのに対し、後者は暗灰色を呈している。5～7はほぼ同一器形である。口縁部平坦面もやや内側に傾斜していることや、貼付け突帶が口縁直下に位置し、胴下部が張り出し刷毛目調整をもつことなどである。胎土、焼成は良好で色調は明褐色を呈する。8は半分以上の壺形を残し口径28.5cm。8・9は口縁が平坦で端部がわずかに下に向き肥厚している。8の口縁直下の貼付け突帶はミミズバレ状で、2条巡っていたと思われる。焼成は甘く灰色及び黒色を呈している。10は胎土に金雲母を含み、焼成も良く堅緻である。口縁部はわずかに凹み、端部は方形を呈する。貼付け突帶はシャープで、刷毛目調整の後ヨコナデしている。11は大形の破片で、胴部以下は磨耗しているが、刷毛目調整の跡がわずかに残る。口径は28cm。12は10とはほぼ同様であるが、口縁部が外に向って傾斜している点が違っている。13は壺の中では小さい型であるが、口縁は外に湾曲し、たれ下がった形になっている。突帶はなく胴部もあまり張らない。かすかに刷毛目が残るが、ほとんどナデ消されている。胎土には石英粒や白い砂粒、長石を含み、色調は内外とも暗褐色を呈する。14は頸部がよくしまった壺タイプである。口縁端部は丸くおさめられ、内側に向って湾曲し、端部はやや尖り気味である。胴部は大きくふくらむ器形と思われるが欠失している。胎土には石英粒が目立ち金雲母もわずかに含まれる。色調は内外とも明褐色で、焼成良好。復原口径25.2cm。15は口縁部が外反し、内面に丸く張り出す。また外側の端部には斜めに細い刻目が付けられている。頸部には突帶が巡るが、断面は「M」字状を呈する。全体の器形は壺形で、口縁内側と外全体に丹塗痕をとどめる。胎土、焼成とも良好。復原口径31.5cm。16は口縁部が内側に大きく傾斜し、貼付けの突起で区別している。斜行する外側端部には約3cm間隔で刻目を入れ、内にわずかな張り出しをもたせている。内外面とも粗い条痕調整のあと化粧土が施されている。胎土には石英粒を多く含み、黄褐色で焼成良好。復原口径31.5cm。

壺形土器

17は大形の壺口縁部である。口縁平坦面は10cmを計り、内側には弱い段が張り出し、頸部と明瞭な一線を画している。外側は逆に約5mm幅で張り出し、下端には鋭利な施工具による刻目が巡る。頸部から胴部にかけては急なカーブを示し、全体の形状を壺形に近いと思われる。内外面全体に丹が塗布されている。胎土には石英粒が目立ち、断面は暗灰色であるが焼成は良

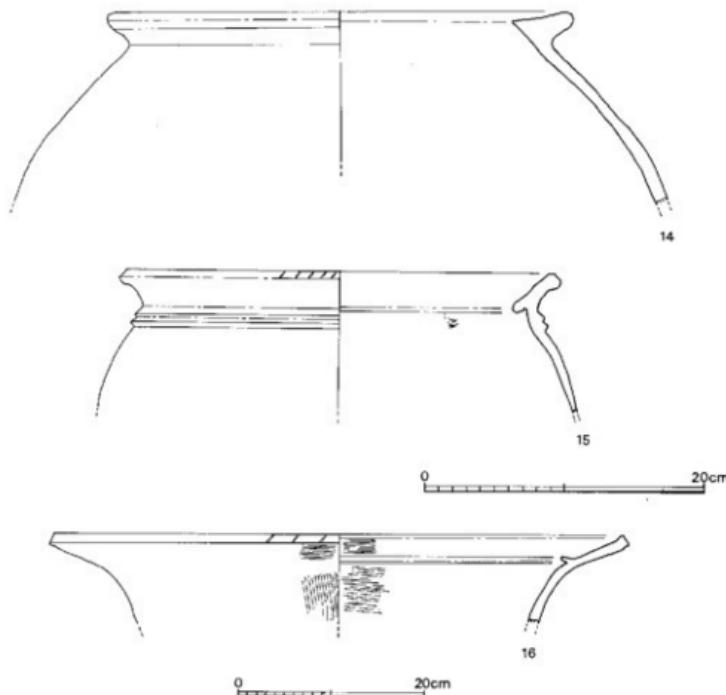


第5図 出土遺物(I)



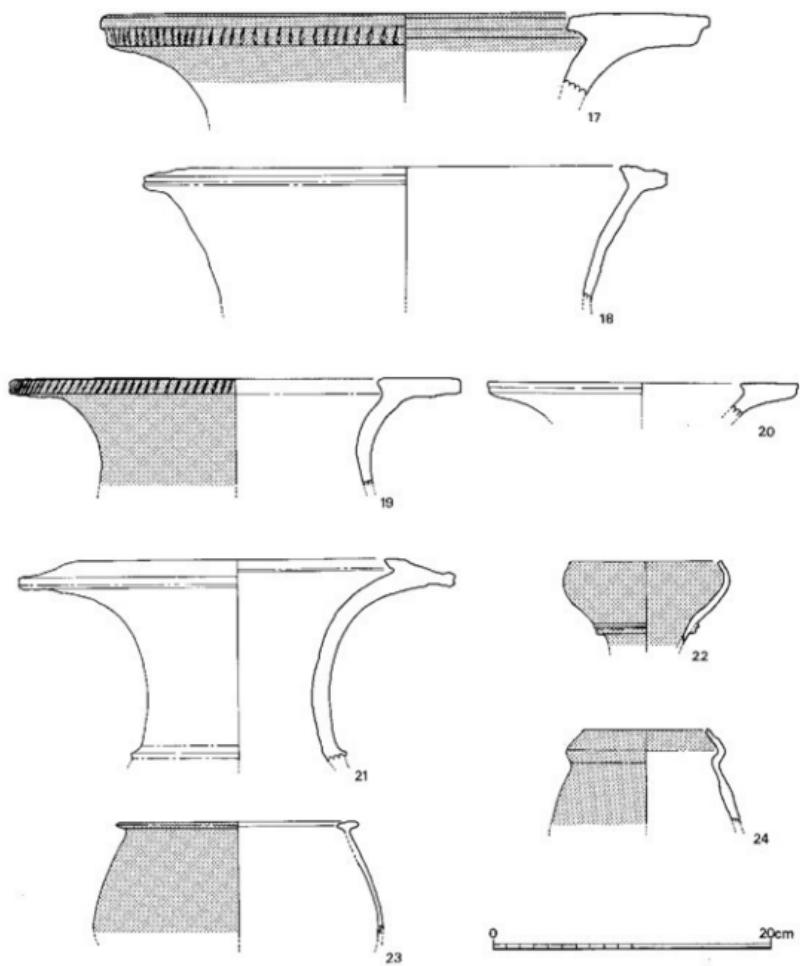
第6図 出土遺物(2)

好。復原口径62cmを計る。**18**も甕棺になると思われる。口縁は若干外に低くなり、端部はわずかな凹を見せる。内側端部は尖り気味に丸くおさめられ、断面三角形を呈している。頸部から胴部にかけてはゆるく内側にカーブしている。口縁直下は水引きのナデがされている。胎土には石英粒や白い砂粒を含み精選され、焼成も良好である。**19**は鉢先状口縁で、平坦部がわずかに外に傾斜する。内側端部をわずかに欠失するが尖るものであろう。外端部は刻目が幅一杯に施されている。口縁下側は中央がふくらと丸味を帯びるように仕上げられ、外側全体に均布されている。胎土はよく精選され、焼成も良好である。復原口径31.2cm。**20**も**17**と同様の器形だが刻目をもない。**21**は口縁部から頸部にかけてほぼ完形である。鉢先状の口縁は下側をふくらと厚味を帯び、弱い沈線が巡る。よくくびれた頸部下端から胴部に移行する部分には貼付け突帯が一部残るが、これはM字突帯であろう。胎土には石英粒と白い砂粒が目立ち精選され、焼成も良好である。口径は約31cmを計る。**22**は袋状口縁壺の口縁部分である。赤褐色の地肌の上に丹は内側に塗布している。頸部を接する部分には断面M字形の貼付け突帯が巡る。丹塗りのあとでヘラ磨きをしているが、磨耗している部分が多い。口縁の復原口径11.2cm。**23**

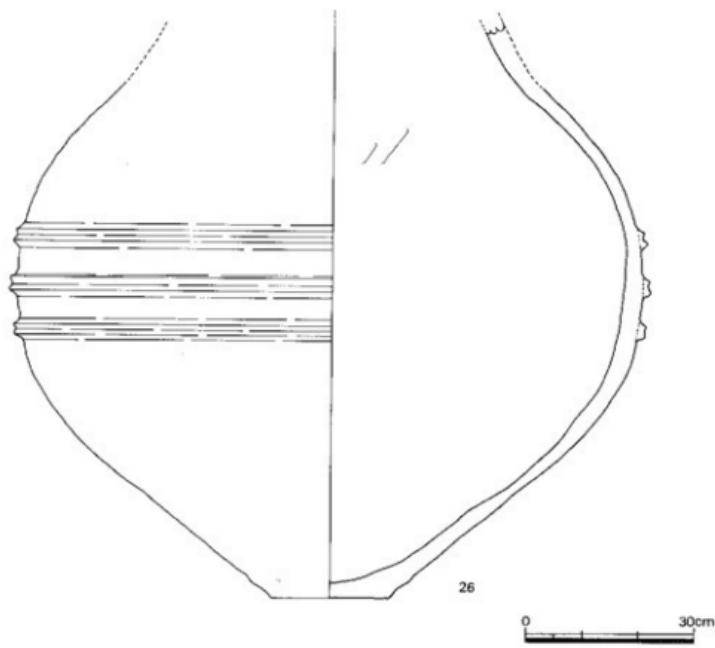
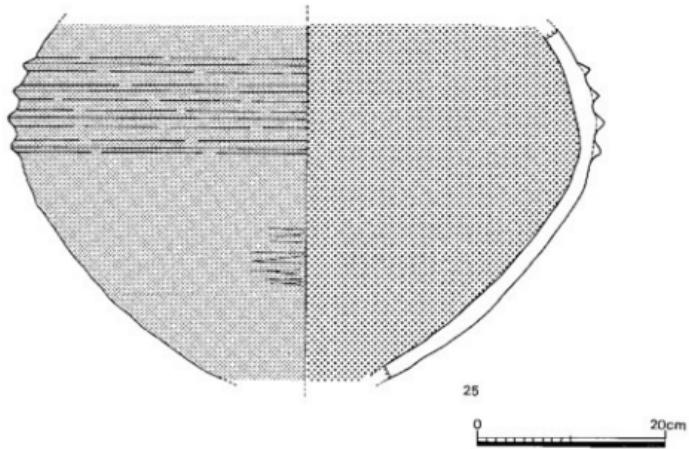


第7図 出土遺物(3)

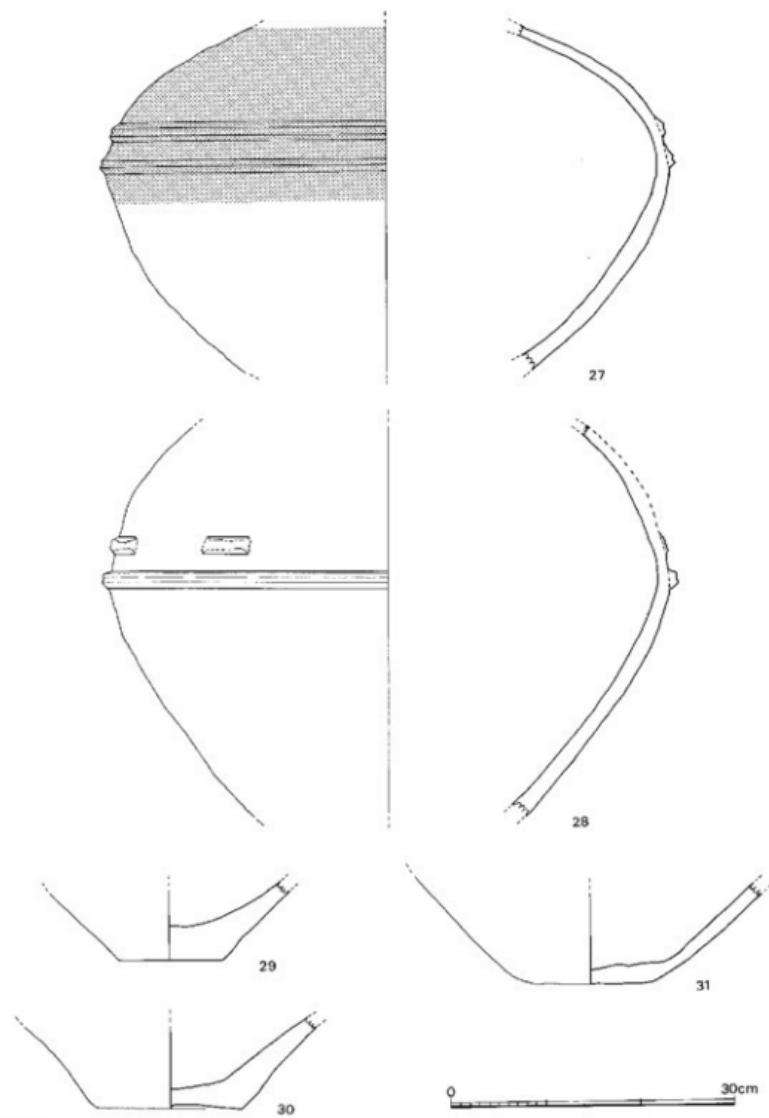
は小形の無頸壺で、口縁部の内側が内傾し、尖り気味に丸くおさめられている。胴部は下方に丸い張り出しの中心をもつ。全体に薄い器壁で仕上げられ、胎土も精選されている。口縁上端から外側にかけ丹が塗られ、磨かれている。復原口縁径16.8cm。24は袋状口縁を有する変形小壺である。胎土は特に精選され、灰褐色の地肌に丹が塗られている。さらに外側頸部から下にかけては繊にヘラ磨きしている。丹塗りは口縁内側内渦部にもわずかに認められる。復原口縁径8.8cm。23～26は球形の胴部をした壺形土器である。25是比较的大型の壺胴部である。肩から張り出し部にかけて4条の断面三角の貼付け突帯が巡る。外側全体に丹が塗られ、そのあとでヘラ磨きされている。胎土、焼成は良好。最大復原径31.8cm。26は底部から頸部まで火が残り、口縁部を欠失する大形の壺形土器で、棺として利用された可能性もある。頸部のよくしまった部分の内側は残っているが、外は接合部で剥落している。胴部張り出し部には2cmの間隔でM字形の貼付け突帯が3条巡る。内側ともヘラ状のもので整形後ヨコナデされている。底部は直



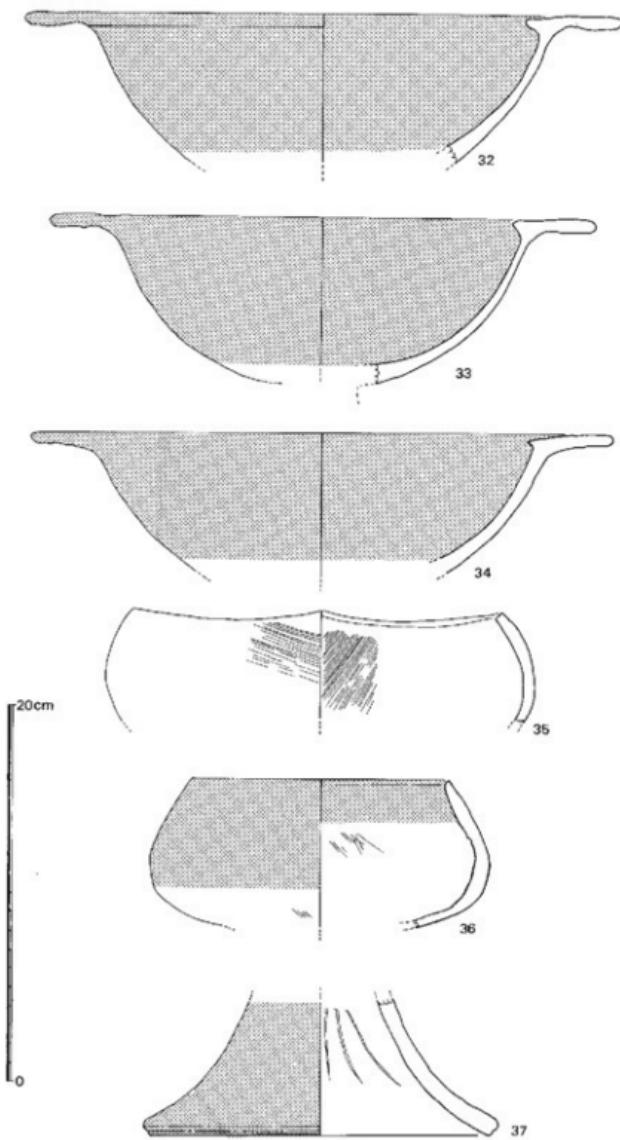
第8図 出土遺物(4)



第9図 出土遺物(5)



第10図 出土遺物(6)



第11図 出土遺物(7)

径10cmを計り、平坦でやや内湾する感じで立ち上がっている。胎土は石英粒などを含み焼成良好だが、一部黒ずんだ部分などが外側に見られる。最大胴部径57cm。残存高51.6cm。**27**はやや肩平錐をした胴部で2条のM字貼付け突帯をもつ。突帯直下から上部にかけて丹塗りが見られるが、大部分が剥落している。全体的にヘラ磨きの痕も残している。胎土、焼成とも良好で、最大胴長48cm。**28**は胴部に2条のM字貼付け突帯をもつが、上部は大部分が接合面からはずれている。胎土は石英粒を多く含み粗さが目立つが、表面は若干磨耗している。器壁はうすく仕上げられ、色調は明褐色で焼成は良好。復原最大胴長48cm。**29~31**は壺底部である。**29**は直径5cmの平坦面をもつ底で、立ち上がりは外に開き内湾する。かなり磨耗しているが、部分的に磨きが残る。内面は黄褐色で器壁はあれている。石英粒と白い砂粒が多く含まれる。**30**は精選された胎土を使い、底部径は7cmでやや上げ底。立ち上がりから胴部にかけて丹が塗布され、内面は褐色。**31**は径7cmの底部立ち上がり部にかけて磨耗を受け、丸くなっている。内面は若干凹凸がありあれているが、外側は磨かれている。内外とも灰色を呈し、焼成は甘い。

高 坯

32~34は鉢先状口縁の高坯である。**32**は非常に精選された胎土を堅緻に焼き上げている。器表は赤紫色でその上に丹を全体に塗っている。口縁部はほぼ水平で、下部をふくらと仕上げている。脚部の付く直前で欠失している。**33**は前者よりも体部が若干深くなっているが、口縁径は逆に小さい。胎土は堅緻で灰褐色に焼き上がった上に丹を塗布している。底の方は厚味を増した所で欠失しているが、脚部につながると思われる。**34**は口縁が内側に若干傾斜している以外はほとんど変わらない。**35~36**は椀形の高坯で**35**は平坦な口縁部が波状を描くものと思われる。外面は丁寧な刷毛目が横位に付され、内面は斜めに調整のあと口縁直下はヨコナデされている。胎土は精選され白い砂粒や金雲母が目立つ。復原口縁径19.5cm。**36**は口唇部は丸くおさめられ、脚の張り出しが**35**より下方に位置する。丹は口縁内面直下と外側の脚張り出し部まで塗られ磨かれている。胎土、焼成もほぼ前者と同じで堅緻である。底はすぐ脚部につながると思われる。**37**は均整よいラッパ状に開いた脚部で、端部は内側に丸く面取りされ、外に稜線が付く。外側全体に丹が塗られ、その上からタテに磨かれている。内側には絞りが見られ、全体をヨコナデされている。胎土は非常に精選され、焼成も良好である。口径18.5cm。

弥生後期の土器

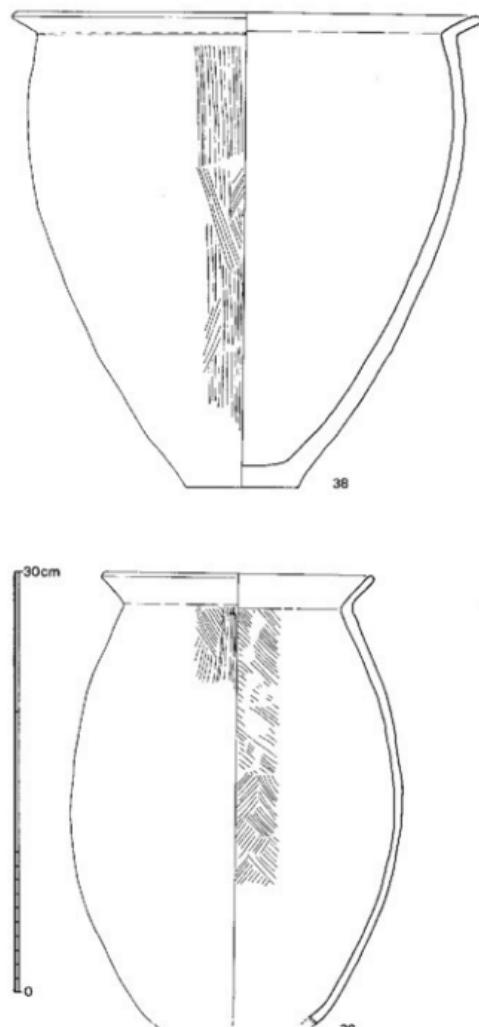
壺形土器（第12図38~43）

後期の土器は第2層が主体であり量的には3層の中期の土器を凌いでいる。**38~43**は壺形土器である。**38**は口縁部から底部まで焼成残存している。口縁部の端部はわずかに内側につまみあげられている。胴部は上部が張り出し、底部まではほぼ直線的で全体に目の粗い刷毛目で縦に入れている。底は平坦で立ち上がり部も明瞭である。胎土には白い砂粒を多く含み焼成良好。復原口縁径33.6cm、器高34.0cm。**39**は頸部がよくしまり、口縁部はほぼ外に直行しヨコナデさ

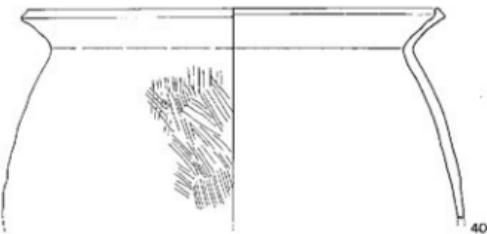
れ、端部は斜めに仕上げられている。胴は長く胴部最大径は口縁部を上回り、内外面に丁寧な刷毛目が施されている。胎土は石英など粗い粒子を含み焼成は良好で褐色から赤褐色を呈している。口縁径19.2cm。残存器高32.0cm。**40**の口縁部は斜行し内側尖り気味に引き出され、稜線が明瞭に入る。胴部径は口縁部より大きく、刷毛目がやや雑に施されている。口縁径22.5cm。**41**は口縁部が内湾し、端部中央は凹み内側はさらにつまみ出されている。器壁は非常に薄手で胴部最大径は口縁部を凌ぐ。胎土は精選され、茶色の砂粒が目立つ。焼成も良好で色調黄褐色を呈する。口縁径26.0cm。**42**の口縁部は内湾しながら中央部で段をもつ。頸部内側には弱い2本の沈線が付されている。胎土、焼成とも良好。**43**は口縁部から胴にかけて約半分が残る。口縁部内側には横方向に刷毛目調整され、胴部にかけても若干痕跡をとどめる。ヘラ削りされているかもしれない。外側胴部は口縁下端を除いて全体に施されている。胴部の張りは下部にあり、口径とほぼ同じである。胎土、焼成とも良好。

壺（第14図44~52）

44は頸からやや内傾気味に立



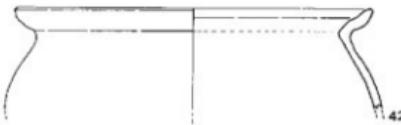
第12図 出土遺物(8)



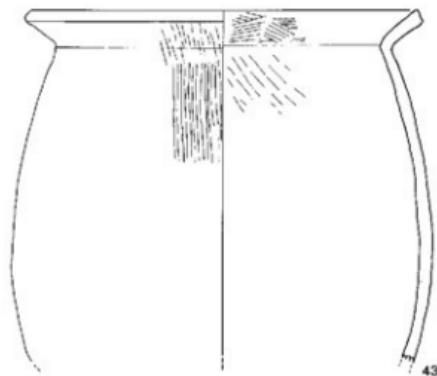
40



41



42



43

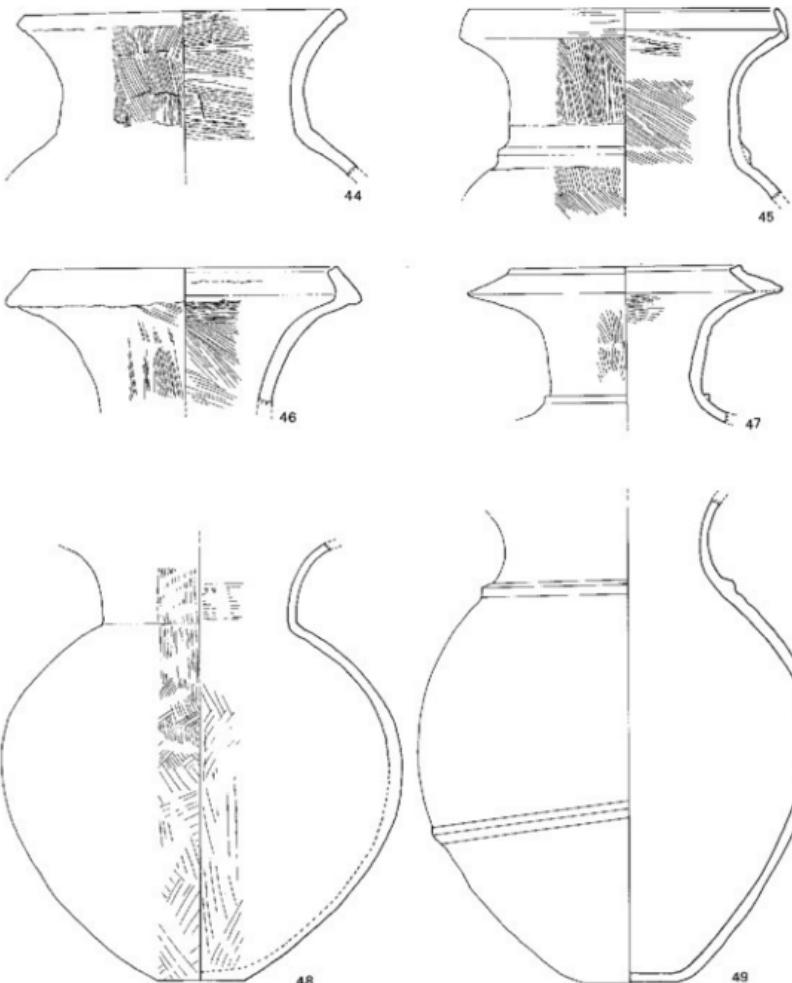


第13図 出土遺物(9)

ち上がり、外に開く口縁である。端部は外に斜行し下端が肥厚している。内側は刷毛目が横方向に短く、外側も縱方向に短く力強く施されている。胎土には石英粒を多く含み堅緻で褐色に焼き上がっている。口径18.0cm。**45**～**47**は袋状口縁土器である。**45**は口縁部は内湾し、端部は丸くおさめられている。頸部から胴部にかけてと立ち上がり部にかけては斜行する刷毛目が付され、口縁部にかけてはナデ消されている。外側は口縁部がヨコナデされ、それ以下頸部までは刷毛目が施されている。また頸部には帯状をした貼付け突帯が1条巡りヨコナデされている。胴部にかけても不規則に刷毛目が施されている。胎土にはやや粗い石英粒などが混じるが、焼成もよく堅緻に仕上げられている。復原口径16.5cm。**46**は口縁部がわずかに外反し、端部は内傾している。袋状になる内外の部分は刷毛目の上をヨコナデされている。頸部は内外ともに刷毛目調整されている。胎土には石英粒や白い砂粒や金雲母が混じり、赤褐色で焼成は良好。復原口縁径は19.2cm。**47**は頸部のよくしまった部分に断面三角形の貼付け突帯を有し、直線的に立ち上がった頸部は急に大きく外反し、角度の狭い袋状部を形成する。内側に屈曲した口縁部は角度が狭く、反っている。口唇部は粘土が貼付けられ内傾している。口縁の尖って張り出した端部にも粘土が貼付けされ鉢先状を呈している。刷毛目は内側頸部の開いた部分と、外側頸部の直線的な部分に施され、あとはナデ消されている。胎土には石英粒や白い砂粒を含み、焼成は良好。口径内径16.0cm。袋状張出し部径22.0cm。**48**は口縁端部を欠くほぼ完形の土器である。頸部はよくしまり、胴部の間に明瞭な稜をもつ。胴部はほぼ球形を呈し、底部は立ち上がり部は丸くなり、底はレンズ状を成す。内側は胴部下半から底にかけて粗い刷毛目が施され、外側は胴部から底部全体に細かい刷毛目や粗い刷毛目が不定形の方向に施されている。胴部最大径は36.0cm。**49**は口縁部を欠くほぼ完形の土器である。頸部と胴下半に貼付け突帯を巡らしている。胴部は**48**に較べると長く、最大径は上に位置している。全体に磨耗を受けており、刷毛目らしき痕がかすかに一部に残る程度である。底部も磨耗を受け丸くなっている。胎土には石英粒が目立ち粗く、焼成も甘い。色調は黄褐色。胴部最大径35.0cm。**50**は大きく開いた口縁の外に斜行した端部に刷毛施文具と思われる櫛状のもので斜めに押圧している。頸部はよくしまり、くびれ部には断面三角形の貼付け突帯が付く。この部分はヨコナデされているが、他は刷毛目。内側も口縁の開いている部分に横方向に刷毛目が施されている。胎土は良好で堅緻、外側は赤褐色を呈す。復原口縁径22.5cm。**51**は口縁径24.6cm、最大胴部径24.3cmでほぼ同じ大きさの器形である。口縁部は外反し端部は中央部がわずかに凹む。胴部は長胴で外側全体に目の粗い刷毛目が施されている。内側は頸部から上部に限られている。胎土は割合精選された土が使われ、器壁は薄く仕上げられている。**52**は**51**とほぼ同様の形態であるが、胴部は球形で、口縁部も短い。また内外の刷毛目調整も細く丁寧で、焼成も良く堅緻に仕上げられている。口縁部径18.6cm、最大胴部径26.1cmで胴部が大きい。

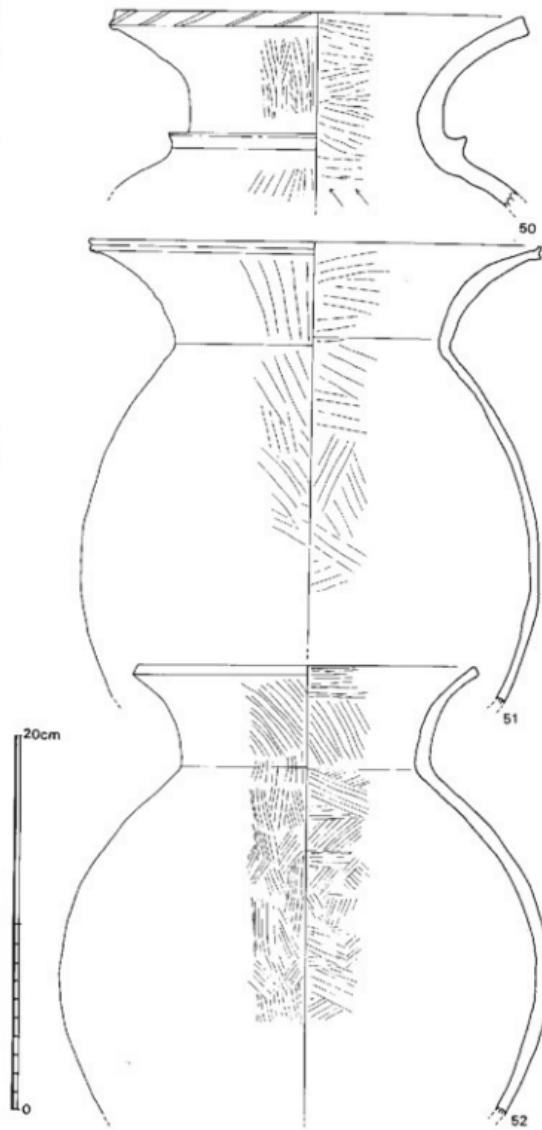
高 坏 (第16図53～58)

53は坏部で1/4程残る。ゆるく内湾して伸びる坏部は、口縁部で外反して端部は丸くおさめら



第14図 出土遺物⑩

れている。外反した外側には波状に暗文が描かれ、その上をヨコナデされている。胴部はヘラ磨きされ、脚部つけ根に近い方は刷毛目が残る。内側は全体にヘラ磨きされている。胎土には石英粒や茶・白の砂粒を含み、焼成は良く明褐色を呈している。復原口縁径は30.0 cm。54は完形品である。口径27cm、器高21.3cmで、坏部は若干いびつである。坏部は内湾して、口縁部は外反し、端部は尖り氣味におさめられている。内側は放射状にヘラ磨きされ、外側は口縁がヨコナデされている以外はヘラ磨きされている。脚部は細くしまり、やや内湾氣味にラッパ状に開き端部は直線的である。穿孔はほぼ同じ高さに3箇入れ、内外とも丁寧な刷毛目が施されている。脚つけ根内側にはしづり痕が残る。胎土、焼成とも良好で色調は一部黒斑があるが褐色を呈する。55は坏胸上部と脚端部を欠いている。脚部中心径は6.6 cmで大きい。穿孔は3箇

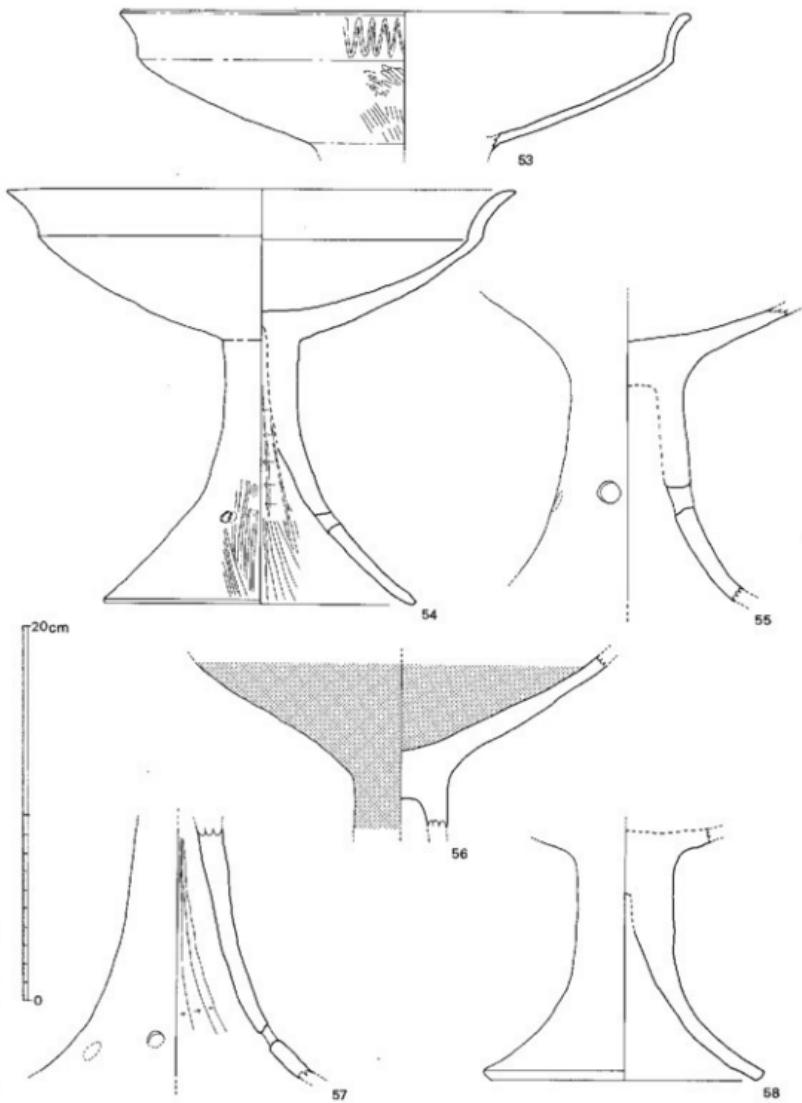


第15図 出土遺物(1)

所だが各自高さが一定でない。胎土には粗い石英粒が目立つが、焼成は良好。表面は磨耗を受けている。**56**は坏から脚にかけての破片である。胎土は非常にきめ細かな土を使い堅く焼きあげられ、内外全体に丹が塗布し磨いている。脚は細く長くなるようであるが、そうであれば中期の高坏ということになる。**57**は**54**に似ているが表面が磨かれている。穿孔はほぼ同じレベルに3箇所認められる。**58**は坏部を欠くが脚部は残る。脚部のつけ根は非常に狭くその分だけ厚味を増している。脚端部は外反するように開き丸くおおきめられている。脚の長さが低いのが特徴としてあげられる。脚復原口径18.0cm。

その他の土器（第17図59～67）

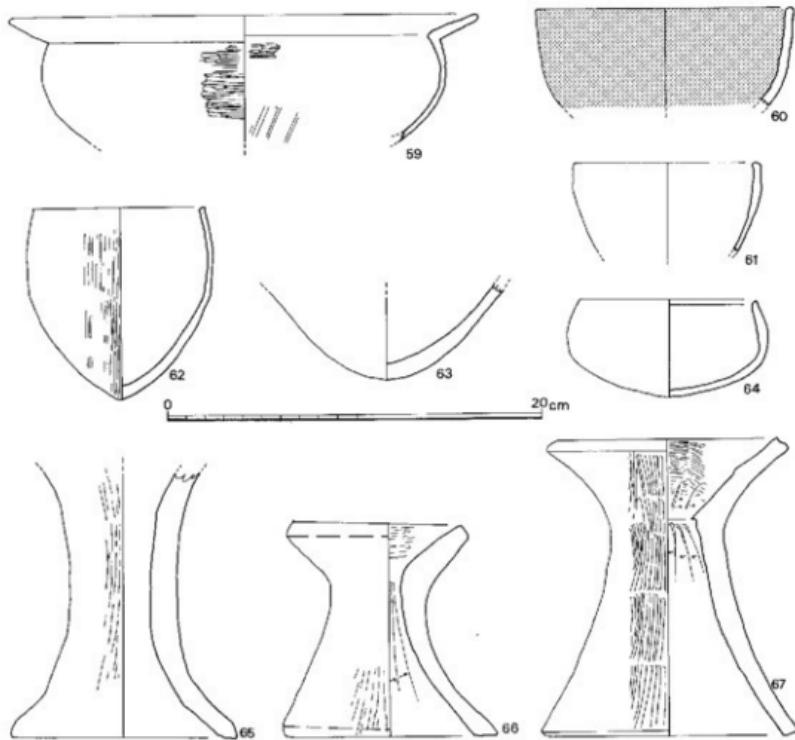
59は復原口縁径24.0cmの鉢形土器である。口縁部は直線的に外反し端部は丸くおきめられている。頸部はきつくしり、胴部は丸くカーブする。内外とも細いヘラ状工具で横に磨かれている。口縁下端だけはヨコナデされている。胎土はきめ細かく焼成も良好で器壁薄く丁寧に仕上げられている。**60**は楕円形の土器で復原口縁径13.5cm。内外に丹が塗られ口縁端部は平坦におきめられ、外側直下にわずかな凹みが見られる。胎土には茶色の砂粒が混じるが、きめ細かく焼成も良好である。**61**は復原口縁径9.6cmの小形楕であるが、胴下部がすぼまることからジョキに近い形か。器壁は非常に薄く、内外面に化粧土がかけてある。胎土はきめ細かく焼成も良好。**62**はほぼ完全形の砲弾形をした小形の楕形土器である。口縁はわずかに内傾するが、外は直下にすぼまり外反している。胴部はゆるくふくらみ尖底へとつながる。外面は刷毛目が施されるが、口縁下部はヨコナデされている。胎土は精選され焼成も良好。色調は灰黄褐色を呈する。口縁径9.2cm、器高9.8cm。**63**は**62**より厚く大きいが、器形は同じ砲弾形を成すものと思われる。**64**は小形の鉢で、全体は丸底であるが、わずかに底部を意識したと思われる部分がある。口縁部は内部だけが外反するように尖り気味におさめられている。内外とも放射状に中心から外に向い磨かれ、その上に化粧土がかけられている。胎土には石英粒が目立ち焼成は良好。内外とも赤褐色を呈する。口縁に丹ではないかと思われる部分があるがはっきりしない。**65**～**67**は壺台である。**65**は上端部を欠失している。筒状の部分は同じ幅で下端の開く部分につらなり、底の部分は中央部がわずかに凹む。胎土には石英粒を多く含み粗く焼成も甘い。色調は暗灰黒色で器表全体にヒビ割れを生じている。下端径12.1cm。**66**は器高12.0cmと低く、上部がよくしまり、外方向に小さく開いている。全体は手捏ねで仕上げられていびつである。内側は削られている。**67**は上下の開き部の口径はほぼ同一で13.0cm前後、器高は21.5cm。外側は丁寧な刷毛目で仕上げられ、内側は部分的に横方向に刷毛目が残る。くびれ部分は上部に位置し下方に広がる。壺部は上が外に斜めに、下はほぼ平坦におさめられている。胎土、焼成とも良好で堅緻である。



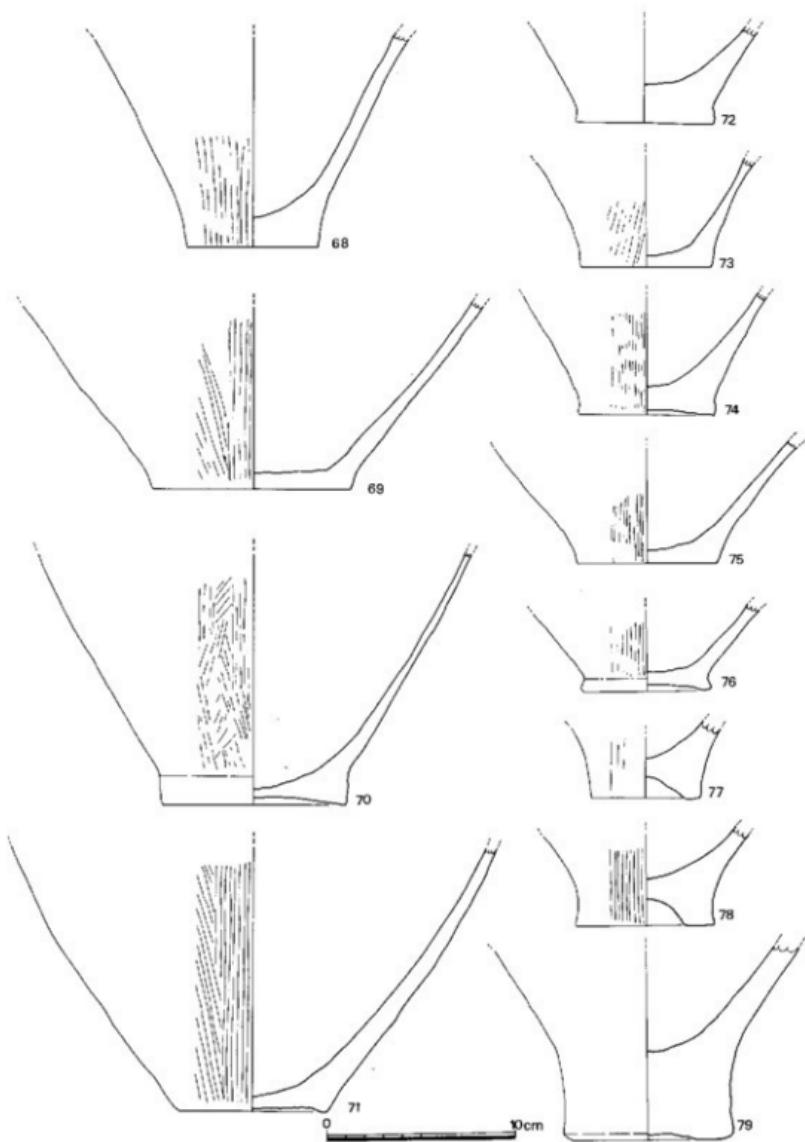
第16図 出土遺物(1)

底 部 (第18・19図68~88)

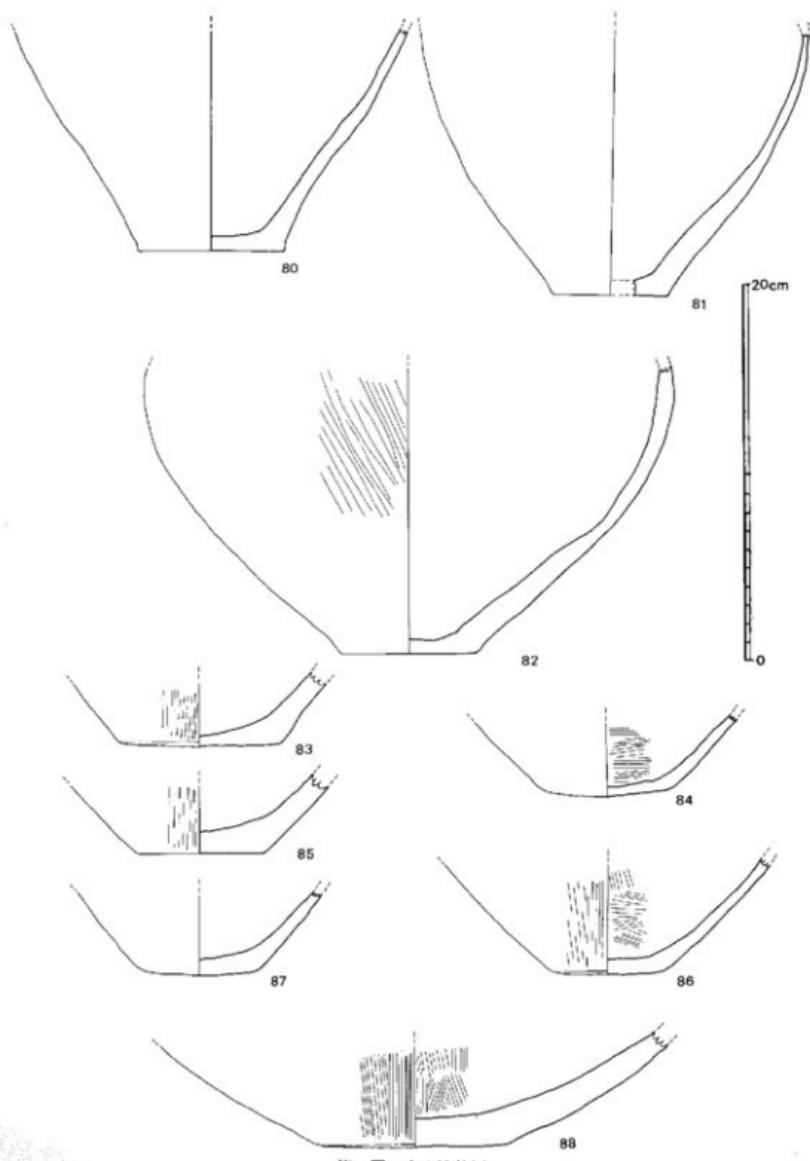
底部はここに図示しなかった他にも多く出土している。68~62までは中期の壺底部として挙げたが82は壺の可能性もある。ほとんどの底は立ち上がりから腹部にかけて刷毛目調整痕を残すか72や78のように施されていないものもある。また底は68・69などに見られる平坦面の一群と、70や74などのわずかにあげ底になるものや、77・78のように大きくあげ底になる一群に区分することが出来る。79は底の厚味が増し、立ち上がり部が細くなるものもある。82は腹部の張りから壺と思われるが、刷毛目が上方に認められ、下端はナデ消されている。83~88は後期に含まれる底部である。全体的に底は平坦に近いが丸味を帯びており、立ち上がり部分にそ



第17図 出土遺物③



第18図 出土遺物④



第19図 出土遺物(5)

の特徴が出ている。胎土も中期の土器に較べるとやや粗く、焼成も甘いものが多い。

石 器

石器はすり石が数点と次に図示した石器が出土した。

くど石（第20図）

かまととして利用された「くど石」である。その形状から鳥帽子石とも呼ばれ、弥生時代に出土する壱岐島独自の石器である。多孔質の凝灰岩を利用し、手で持ち運べるよう耳の部分を彫り出している。くど石としては小形に属し、高さ14.0cm、重さ1kgを計る。

砥 石（第20図）

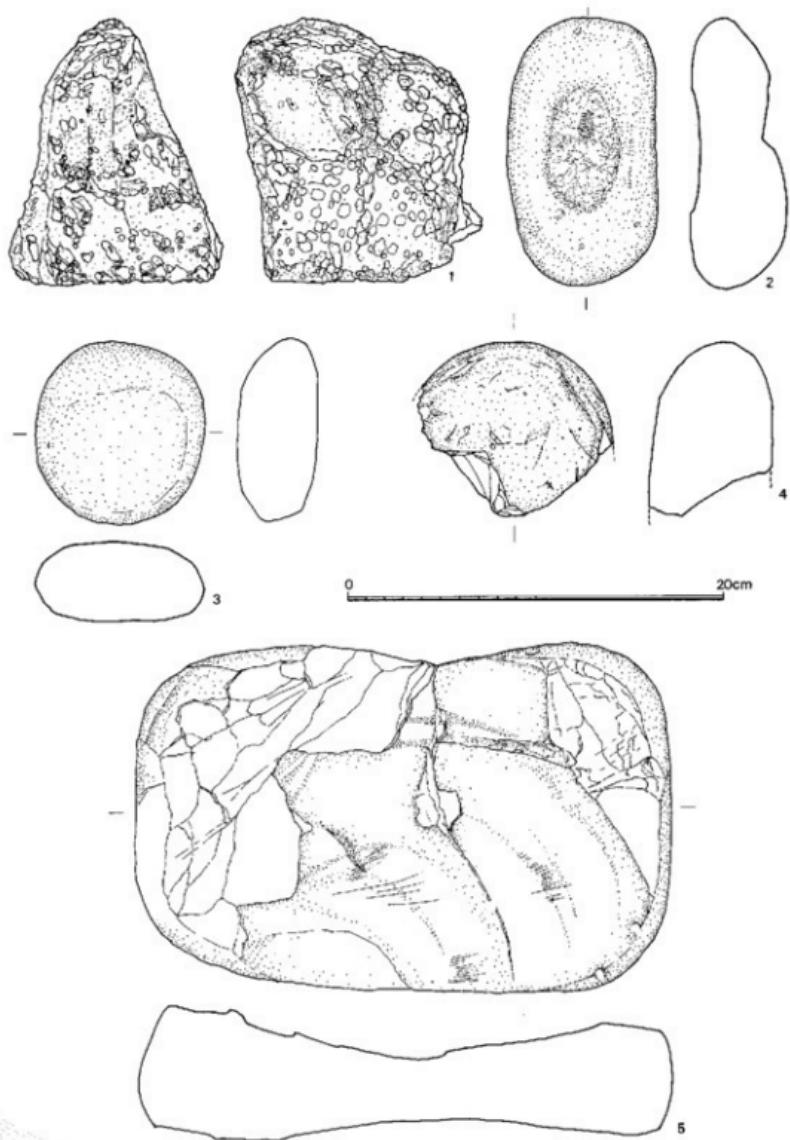
隅丸長方形の比較的扁平な礫を用いている。側縁に自然面を残し両面とも砥石として利用している。石質は硬質の砂岩で重さ5kg。

凹 石

梢円形の安山岩礫を利用した凹石。片面だけしか利用していない。長さ14.0cm、厚さ5.0cm、重さ1kg。

すり石

3と4はほぼ円形の安山岩礫を利用、両面に磨れた痕跡をとどめる。周縁は自然面を残す。
3は重さ800g 4は半分を欠失している。



第20図 出土遺物(15)

(3) 小 結

第1地点における出土状況は、先にも述べたとおり崩落土中からの遺物が大半を占める。しかし層位的に確認された遺物も少なくない。これまでの調査は、台地中央部を中心に進められてきたが、今回の地点は東側縁辺部にあたる。北側に隣接する低い水田部は、古くは高い畠だったと思われており、水田化のときかなり削平されている。

出土遺物は弥生時代中期中葉頃と後期終末までに至っている。器種は多様化しており、第5図～第6図の壺などの日用品的なものから、器全体に丹が塗布されている第8図壺形土器や第11図高環などが供獻用の性格を備えていると思われる。壺形土器で目立つのは第8図17である。口縁直下に刻目を有し、内外全体に丹が塗られている。18とともに壺柄として利用された可能性もある。胸部に貼付け突帯をもつ壺は第9図25・26、第10図27・28であるが、25は外側全面に丹を、内側全面を黒色に塗った特殊な壺である。26は大形の壺で、これも柄として利用された可能性がある。

後期の土器は38の壺形土器が古期のタイプを示し、そのあとにつまみ出し口縁の土器が続く。39は口縁部と胸部がほぼ同一で長胴化し、後期中頃に位置する。壺は袋状口縁を有する土器は45の中頃から47のように二重口縁に移行する段階のものまで含まれ、50～52の壺も並行するようである。高環についても後期前葉のものは見られないが、中頃のものが多いようである。その他の土器の中には59・62・63や66のように終末に入る土器も見られる。

これまでの原の辻遺跡の調査では、一番古い土器は昭和49年大原地区の墓域から出土した金海式や城ノ越式タイプの壺形土器が確認されている。また岡場整備に伴う範囲確認調査でも重弧文の付く土器片が出土している。しかし、これら前期に属する土器は量的に非常に少なく出土地点も限られている。

これに対して中期から後期にかけての遺物は、ほぼ台地全域と低地の周辺地域から出土しており、時代が新しくなるにつれ集落の広がりも大規模になったと考えられる。

2. 第2地点の調査概要

台地の西側にあたる第2地点は、幅14m、高さ3mにわたって崩れ落ちていた。そこで、崩れ落ちた箇所を中心に南北約14m、東西約2mの調査区を設定し、崩壊した土砂を取り除いた後、層ごとに掘り下げた。その結果、弥生時代後期を中心とした遺物と、2条の溝を確認した。また、後世の溝1条、柱穴2個を確認した。



第21図 調査区域図

(1) 土層 (第22図)

土層は基本的に4層に分けることができる。

第1層は耕地造成に伴う埋め土で、厚さは約1.5mになる。中に大小さまざまな礫を含み堅く結まっている。

第2層は黒褐色の粘質土で、厚さは約0.4mになる。古墳時代以降の流れ込みによるもので、遺物もほとんど小さな破片である。主に中世の遺物が出土する。

第3層は複数に細分できるが、このうちa層が包含層であり、b～f層は遺構の覆土である。

3 a層は茶褐色の粘質土で、弥生時代から古墳時代の初めにかけての遺物が多く出土する。また、円錐が多く出土した。3 b層は黒褐色の粘質土である。3 c層は赤褐色の粘質土である。

弥生時代後期の土器が多く出土する。3d層は黒色土で、3号溝中にわずかに認められる。3e層は黄色の混ざる茶褐色の粘質土である。無遺物層で3号溝中に認められるが、2号溝の南側の立ち上がりが3e層と同じ土層から切り込んでいる。3f層は黒褐色の粘質土で、3号溝の底部に認められる。弥生時代後期の土器が多数出土した。

第4層は黄褐色の粘質土で、地山である。3層までの土層に比べ灰色がかっている。また、下にくいくぼみが増し、風化跡を多く含むようになる。

(2) 遺構 (第22図)

調査の結果、2個の柱穴と3条の溝を確認した。

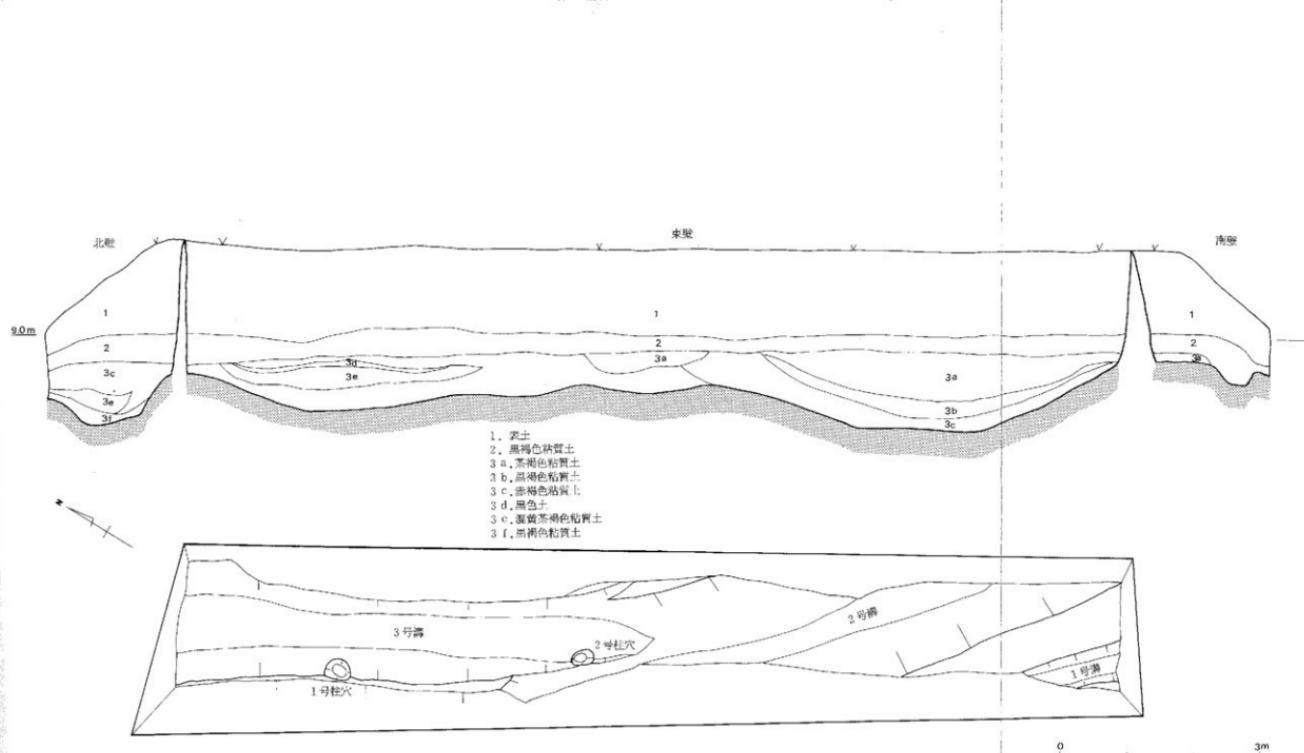
1号柱穴は、長径約0.4m、短径約0.3m、深さ約0.2m。2層・黒褐色粘質土からの落ち込みであるが、遺物の出土はなかった。

2号柱穴は、長径約0.4m、短径約0.1m、深さ約0.1m。3号溝をほぼ掘り上げた時点で、溝の底にわずかに黒いかたまりとして確認することができた。中の土から後世のものと思われるが遺物の出土はなく、時期は不明である。

1号溝は、幅約0.5m、深さ約0.3mのU字溝で、南東から北西に向かって延びている。また底のレベルは北西側がわずかに低くなっている。中には2層の土が入っていたが、遺物が出土しなかったので正確な時期は不明である。

2号溝は、推定上場幅約2.26m、深さ約1.0m、底幅約0.4m。南東から北西に向かって延び、断面が不完全ながらV字型をなす。溝の南側の立ち上がりはほぼ完全に残っているが、北側の立ち上がりは途中で切れている。遺物は、上部では弥生時代中期の土器片から古墳時代の古式土器片まで出土するが、下部では弥生時代後期の土器がほぼ完形に近い状態でいくつも出土する。また、大小様々な円錐が多く出土した。

3号溝は、上場現存幅約1.3m、底幅約0.6m、深さ約0.7m。2号溝に比べ方向が北に偏り、調査区の長辺とほぼ平行になる。立ち上がりは東側が東壁面に入り込み、西側は掛け面で切られている。また、南側は2号溝によって切られている。溝の上面は地山によく似た、遺物の交ざらない層が約0.4m堆積している。遺物は、その下から土器留のような状態で出土した。そのほとんどは復原が可能で、個数としてはさほど多くない。また、九州中部を中心に分布する黒縫糸の壺が出土した。弥生時代後期のものと考えて間違いないが2号溝とは時間差があると考えられる。3号溝は2号溝と違い一度に埋められ、あるいは埋まったものと思われる。



第22図 土層図及び遭情実測図

(3) 遺物

今回の調査では、弥生時代後期を中心として多くの遺物が出土した。そのうち遺構内出土の遺物を中心に説明する。

第3層出土遺物（第23・24図）

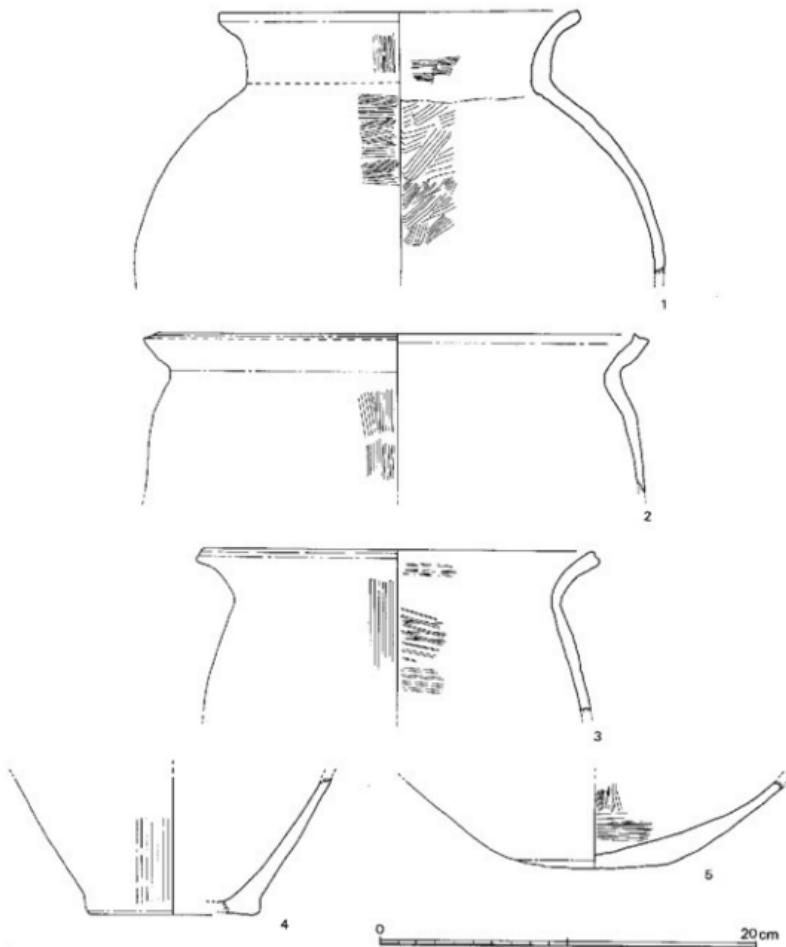
1は壺である。全体のおよそ $\frac{1}{2}$ が残存する。復原口径は19.0cm、残存器高は14.0cm。球形の胴部から口縁部が直立気味に延び、先端部で強く外反する。胴部の外面は目の細かい横方向の刷毛目が施されている。また、内面は肩部に目が粗く深い刷毛目が斜め方向に入り、その下にやや細かい刷毛目が縦方向に入っている。口縁部は、外面に縦方向、内面に横方向の細かい刷毛目を施した後、ヨコナデをしている。色調は外面が米褐色で、胴部の一部と口縁部が褐色をなす。また、黒斑が見られる。内面は褐色で、口縁部は茶褐色をなす。胎土は1～2mm代の石英を多く含み、黒雲母も見られる。器面は風化を受け、荒れている。

2・3は「く字状口縁」の壺である。2は復原口径25.2cm、残存器高8.4cmで、口縁部の一部が残存する。口縁部は、肩の張らない砲弾型の胴部からやや外湾気味に立ち上がり、口唇部をヨコナデによって内面につまみ出している。また、胴部に比べて口縁部が厚い。内面、外面とともに荒れていて、調整が不明瞭であるが、胴部外側に刷毛目、口縁部外面にヨコナデを施した跡がある。色調は、内外とも淡い赤褐色である。胎土は、1～2mmの石英の粒子を多く含んでいる。3は復原口径20.6cm、残存器高8.6cmで、口縁部の一部が残存する。2と同じく砲弾型の胴部をもつが、口縁部が明瞭な屈曲部をもたず内湾気味に立ち上がる。また口唇部には、ヨコナデによって浅い沈線が入る。外面には、口縁部から胴部にかけて縦方向の刷毛目があり、口縁部にはヨコナデを施す。内面は、横方向の刷毛目が入っている。器面が荒れているため、調整は不明瞭である。また、部分的に赤い化粧土が残る。色調は内外とも茶褐色をなす。胎土は、細かい石英の粒子を含む。

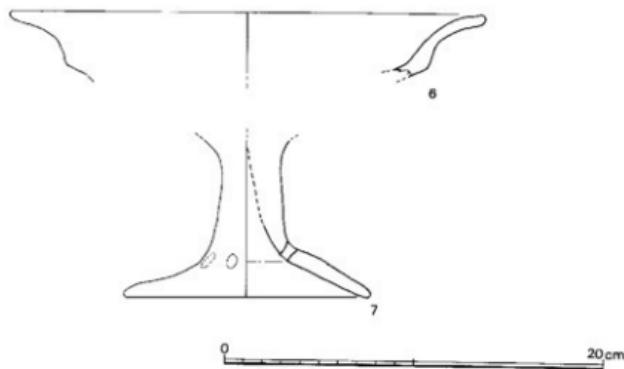
4・5は壺、または甕の底部である。4は復原底部径8.6cm、残存器高7.3cmで、約 $\frac{1}{2}$ が残存する。やや上げ底気味の底部から、胴部が内湾気味に立ち上がる。胴部の立ち上がり部分には、太めの刷毛目が施され、それをナデ消している。内面は荒れているため、調整は不明である。色調は、外面が暗褐色、内面が淡茶褐色をなす。胎土は、粒の細かい石英を含み、黒雲母もわずかに認められる。5は底部径8.6cm、残存器高4.6cmである。凸レンズ状の底部から直線的に立ち上がる胴部をもつ。外面は荒れているため調整は不明だが、内面は底部に近い位置に、横方向の太めの刷毛目が、胴部のほうは細かい縦方向の刷毛目が施されている。色調は、外面が褐色から淡茶褐色をなし、一部黒斑も見られる。内面は、暗褐色をなす。胎土は、大きめの石英の粒子を多く含み、わずかに黒雲母も認められる。

6・7は高杯である。6は復原口径25.0cm、残存器高3.0cmで、口縁部の一部が残存する。屈曲した口縁部は、内外に緩い段状の接合部を有し、ひろく外反し先端を丸く収める。器面が荒れているため、調整は不明である。色調は赤褐色をなし、胎土は、石英や黒雲母の細かい粒子

を含む。1は脚部が完全に残っている。裾底部径は13.0cm、脚柱部の最小径3.2cm、残存器高8.3cmである。裾が脚柱から直線的に伸び、屈曲部に径0.7cmの穿孔を3ヶ所加える。色調は赤褐色をなし、胎土は、小さな石英の粒子を含んでいる。また、器面が荒れているため、調整を判別することはできない。



第23図 第3層出土遺物(1)



第24図 第3層出土遺物(2)

2号溝出土遺物 (第25~28図)

1~10は壺である。1は二重口縁の壺である。口径18.6cm、器高30.8cmでほぼ完形である。胴部は、凸レンズ状の底部からやや外湾気味に立ち上がり、球形をなしている。脇の最も張り出した部分と頸部に、断面三角形の突帯を有する。頸部は朝顔状に開いた後、屈曲して口縁部を作る。調整は、内外ともに刷毛目、口縁部はヨコナデを施している。色調は赤褐色をなし、一部黒斑も見られる。胎土は、大きめの石英粒子を含む。2は残存器高28.0cmで、口縁部が欠損する。凸レンズ状の平底から直線的に立ち上がる胴部は球形をなし、頸部がやや内湾気味に立ち上がる。胴部中央と頸部に断面三角形の突帯をつける。また、胴部下部に縦約4.0cm、横約7.0cmの意識的に穿った穴がある。器面は荒れているが、内外とも刷毛目を入れているのが判別できる。色調は茶褐色をなし、一部黒斑も見られる。胎土は、大きめの石英の粒子のほか数種類の粒子を含む。3は残存器高21.0cm、口縁部が欠損する。凸レンズ状の丸底から外湾気味に立ち上がる胴部は、上半部で最大径をなし、頸部が内湾気味に立ち上がる。器面は荒れているので調整は不明である。色調は淡赤褐色をなし、胎土は、大きめの石英粒子を含む。4は短頭壺で、口縁部の一部が欠損する。復原口径は10.0cm、器高12.1cmである。口縁部は球形の胴部から緩やかな稜線をもって直線的に立ち上がる。外面は刷毛目で仕上げられているが、ところどころ荒れている。色調は赤褐色をなし、一部黒斑も見られる。胎土は石英粒子を多く含んでいる。5は広口壺である。口径は21.8cm、残存器高9.2cmで口縁部のみ残存する。頸部が直線的に立ち上がった後、朝顔状に開く。器面がかなり荒れているため、調整を判別することはできない。色調は淡赤褐色をなし、胎土は大きめの石英粒子を多く含む。6は残存器高11.7cmで、口縁部の一部が残る。口唇部に沈線を施し、また、口縁部の内面に断面三角形の突帯をつけている。色調は淡褐色をなし、胎土に大きめの石英粒子を含む。大形の壺棺と思われる。7・8

は長頸壺の一種と考えられるが、類例を見いだせない。7は口径3.6cm、残存器高7.8cmで、つば状の突起を有する。色調は淡赤褐色で、胎土は緻密である。8は口径4.4cm、残存器高7.0cmで、7と同じような突起を有していたと考えられる。色調、胎土とも7と同じである。9は朝鮮系軟質土器の破片で、肩部が残存する。器面が摩滅しているが、外面には繩縞文が描かれている。色調は黒褐色をなし、胎土には細かい砂粒を含んでいる。10は最大径26.0cm、残存器高10.0cmの二重口縁の壺で、頸部のみ残存する。胴部との付け根に綾い断面三角形の突帯を有する頸部は、朝顔状に開き口縁部に至る。器面が荒れているが内外とも刷毛目を施した跡がある。色調は淡赤褐色をなし、一部黒斑も見られる。胎土は、石英の細かい粒子を含む。

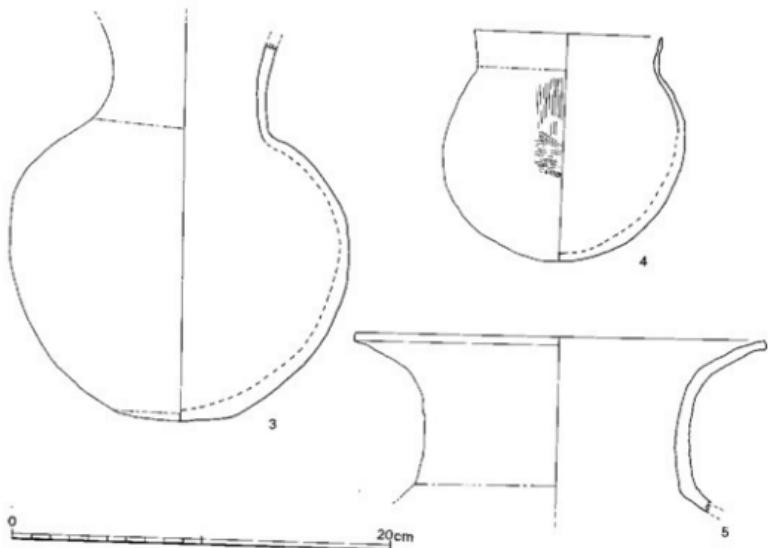
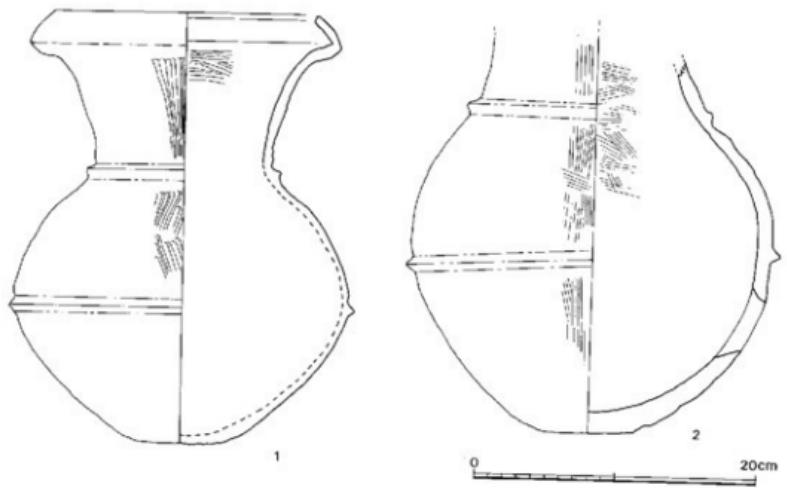
11~13は壺の口縁部である。11は復原口径19.2cm、残存器高8.6cmで、口縁部と胴部の一部が残存する。刷毛目を施した胴部から口縁部が緩やかな肩曲部を有して、短く立ち上がる。口縁部はヨコナデを施している。色調は内外とも丹塗りを施している。12は復原口径18.2cm、残存器高10.3cmである。口縁部は砲弾型の胴部から屈曲して内湾気味に伸び、先端をつまみ出している。内外とも器面が荒れているが、わずかに刷毛目の痕跡がある。色調は赤褐色で、一部黒斑も見られる。胎土には細かい石英の粒子を多く含む。13は復原口径23.0cm、残存器高8.2cmである。口縁部が胴部から直線的に伸び、先端を平たく収めている。内外とも刷毛目を施した後、口縁部にヨコナデを施している。色調は外面が茶褐色で、内面が灰褐色をなす。胎土には石英の細かい粒子を含む。

14・15は壺または甕の底部である。14は底部径10.4cm、残存器高11.5cmで、平底から内湾して立ち上がる胴部をもつ。器面がかなり荒れているため、調整は判別できない。色調は外面が淡赤褐色で、内面が茶褐色をなす。胎土には細かい砂粒を含んでいる。15は底部径7.9cm、残存器高6.1cmである。底部は凸レンズ状をなし、胴部が外湾気味に立ち上がる。外面には荒い刷毛目、内面には細かい刷毛目が施されている。色調は茶褐色で、黒斑も見られる。

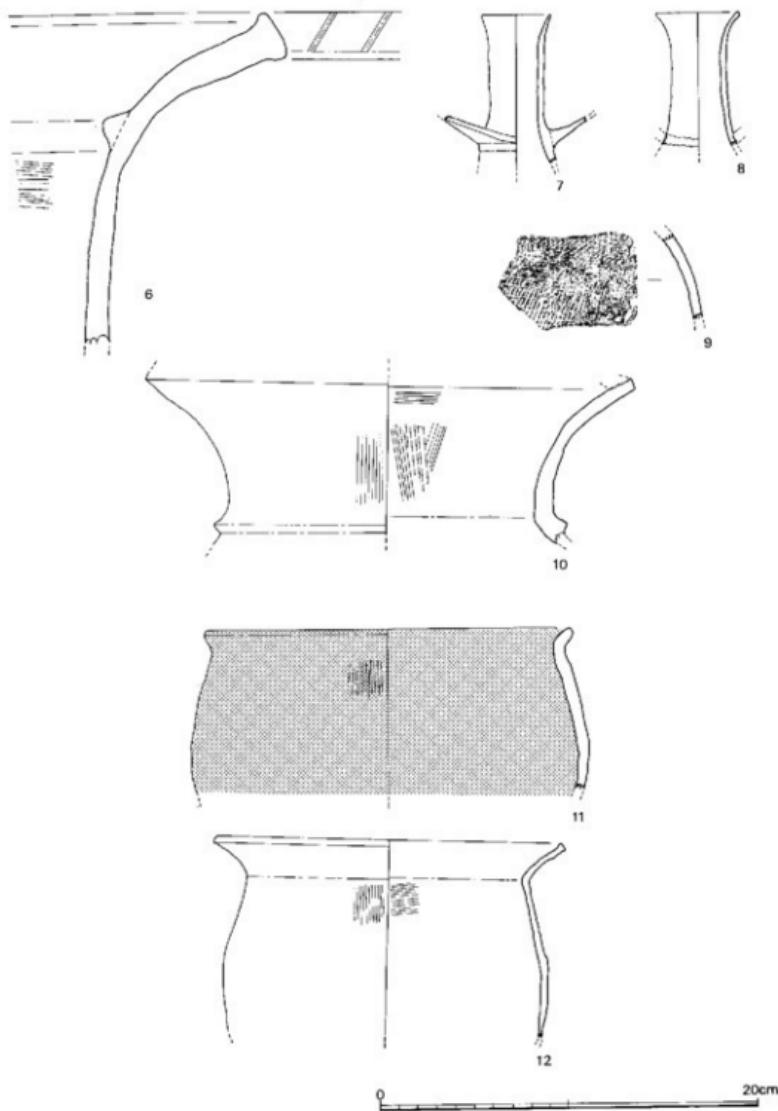
16は復原口径は17.8cm、器高9.6cmの鉢である。底部からそのまま口縁部に至る型式のもので、口縁部は丸く収められている。また、底部には径約0.3cmの穿孔が穿ってあり、匂として使用されたと考えられる。色調は赤褐色で、胎土は緻密である。

17・18は高环の环部である。17は復原口径26.6cm、残存器高6.8cmある。环部は、屈曲した後直線的に立ち上がり、先端部を丸く収めている。色調は淡赤褐色で、口縁部に一部黒斑も見られる。胎土は緻密である。18は復原口径38.0cm、残存器高8.3cmである。环部は緩く屈曲して、内湾気味に立ち上がる。色調は淡茶褐色で、胎土には細かい粒子を含んでいる。

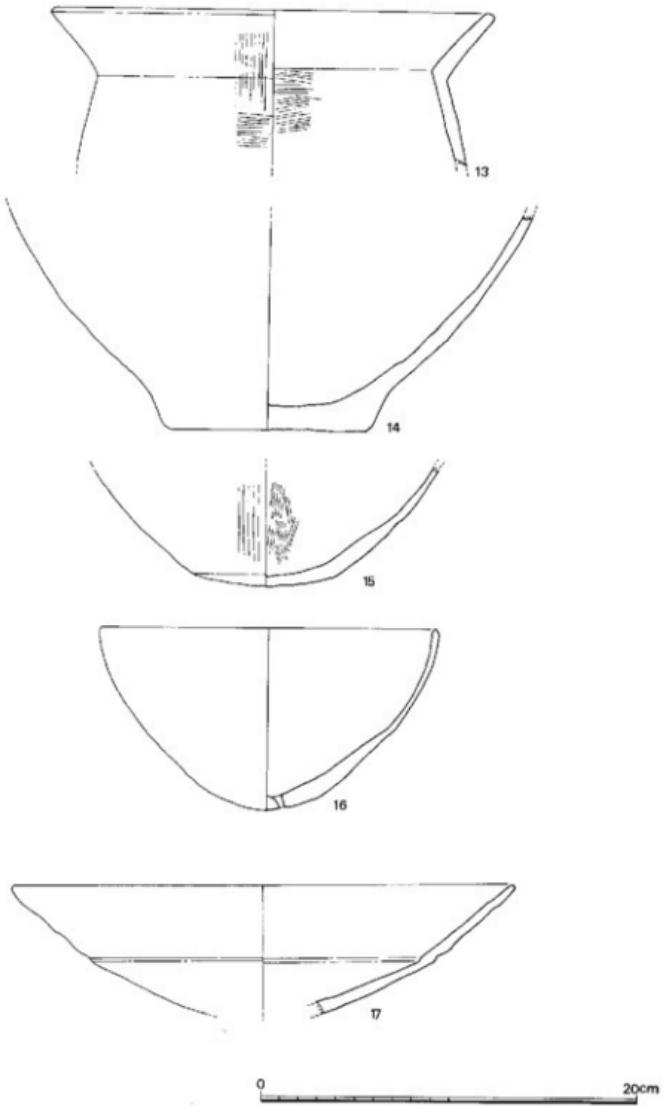
19・20は岩台である。19は受部径7.4cm、器高11.2cmである。体部上位の肩曲部から伸びた受部が、先端でつまみ出されている。体部裾はやや外湾して開く。器面が荒れているが、内外とも刷毛目を施した痕跡がある。色調は赤褐色で、胎土には石英の粒子を含む。20は受部径11.0cm、器高20.0cmである。受部は、屈曲した後先端をつまみ出す。全体に刷毛目調整を施している。色調は赤褐色で、胎土には砂粒を含む。



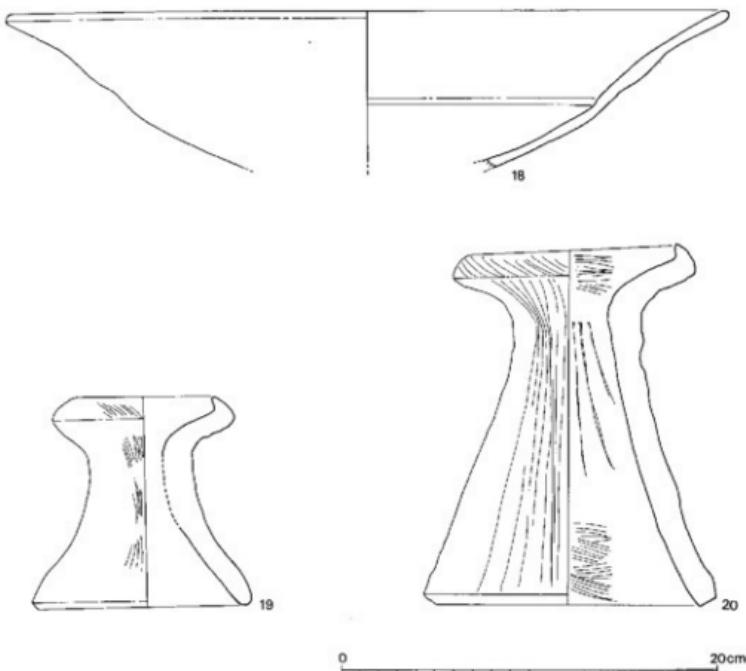
第25圖 2号溝出土遺物(1)



第26図 2号溝出土遺物(2)



第27圖 2号溝出土遺物(3)



第28図 2号溝出土遺物(4)

3号溝出土遺物 (第29~32図)

1~6は壺である。1は口径28.0cm、器高50.9cmの二重口縁壺である。底部は凸レンズ状をなし、球形の胴部が内湾して立ち上がる。胴部中位下と頸部に断面台形の突帯をはる。頸部は真上に伸びた後急に広がり、ほぼ直角に屈曲して口縁部をつくる。器面が荒れているが、刷毛目を施しているのが判別できる。色調は茶褐色をなし、一部黒斑も見られる。胎土に石英の粗い粒子を含む。2は残存器高33.0cmで、口縁部が欠損する。底部は平底で、胴部の立ち上がりは外湾気味である。胴部中位下と頸部に断面台形の突帯をはる。器面が荒れているが、刷毛目調整の痕跡がある。色調は明褐色で、胎土に砂粒を含む。3は復原口径28.0cm、残存器高12.8cmで、口縁部のみ残存する。2条の断面台形の突帯をつけた頸部は朝顔状に開き、口縁部が波状口縁の面影を残しつつ屈曲する。また、全体に刷毛目調整が見られる。色調は赤褐色で、内面には黒斑も見られる。胎土には石英の細かい粒子を含んでいる。4は復原口径12.8cm、残存器

高10.4cmで、口縁部から肩部にかけて残存する。肩部は張っており、口縁部が大きく外反して立ち上がる。器面が荒れているが、一部刷毛目痕跡が残る。色調は赤褐色で、胎土は細かい粒子を含み、軟質である。**5**は復原口径20.0cm、残存器高5.9cmの二重口縁壺の一部である。色調は淡赤褐色で、胎土に石英の細かい粒子を含んでいる。**6**は復原口径9.0cm、残存器高6.5cmの複合口縁壺の一部である。色調は淡赤褐色で、胎土に石英の粒子を含んでいる。

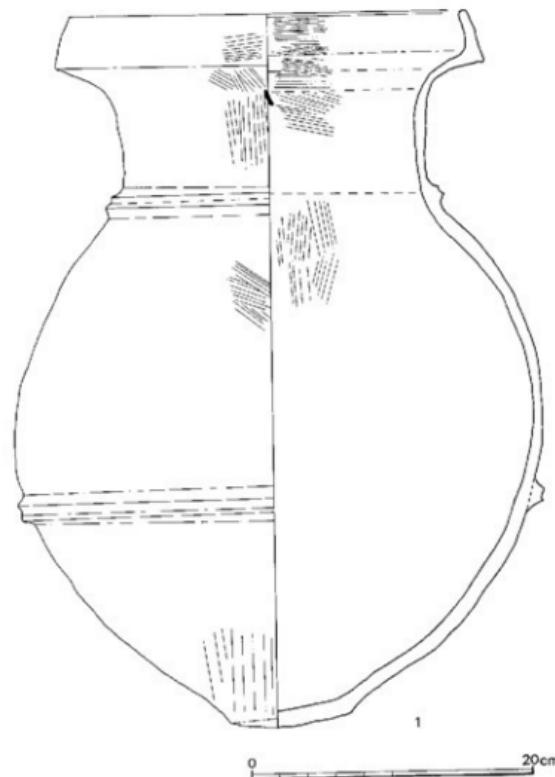
7～**9**は甕である。**7**は口径7.8cm、器高22.9cmの台付き甕である。胴部の器高は低く、広く広がる。肩部はあまり張らず、口縁部が緩く屈曲して内湾気味に伸びる。器面が荒れているので調整が判別できない。色調は灰褐色をなし、一部黒斑も見られる。胎土には石英の細かい粒子を含んでいる。**8**は復原口径14.2cm、器高18.7cmである。平底で胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が**7**に比べて屈曲する。色調、胎土とも**7**と同じである。**9**は復原口径18.6cm、残存器高12.2cmである。肩部はあまり張らず、口縁部は緩く屈曲して伸びる。器面が荒れているが、一部刷毛目調整を見ることができる。色調は淡赤褐色で、胎土には石英の粒子を含んでいる。

10～**16**は壺または甕の底部である。**10**は残存器高4.0cmである。やや上げ底気味の底部から、胴部が内湾して立ち上がる。色調は淡赤褐色をなし、丹塗りと思われる痕跡が見られる。胎土には細かい砂粒を含んでいる。**11**は残存器高3.6cmである。凸レンズ状の平底で、胴部が内湾気味に立ち上がる。色調は丹が施されており、胎土には細かい砂粒を含んでいる。**12**は残存器高5.6cmである。凸レンズ状の平底で、胴部が短く内湾して立ち上がる。色調は赤褐色をなし、黒斑も見られる。胎土には細かい砂粒を含んでいる。**13**は残存器高11.2cmである。凸レンズ状の底部から胴部が直線的に立ち上がる。色調は褐色をなし、胎土には石英の粒子を含んでいる。**14**は残存器高8.9cmである。胴部は凸レンズ状の底部から直線的に立ち上がる。色調は主に赤褐色で、胎土には石英の粒子を含んでいる。**15**は残存器高6.0cmである。凸レンズ状の平底で、胴部は外湾気味に立ち上がる。色調は外面が茶褐色をなし、一部黒斑も見られる。内面は赤褐色である。胎土には大きめの石英の粒子を含んでいる。**16**は残存器高21.5cmである。凸レンズ状の底部から胴部が直線的に立ち上がる。また、刷毛目調整が見られる。色調は外面が褐色をなし、内面は茶褐色である。胎土には石英の細かい粒子を含んでいる。

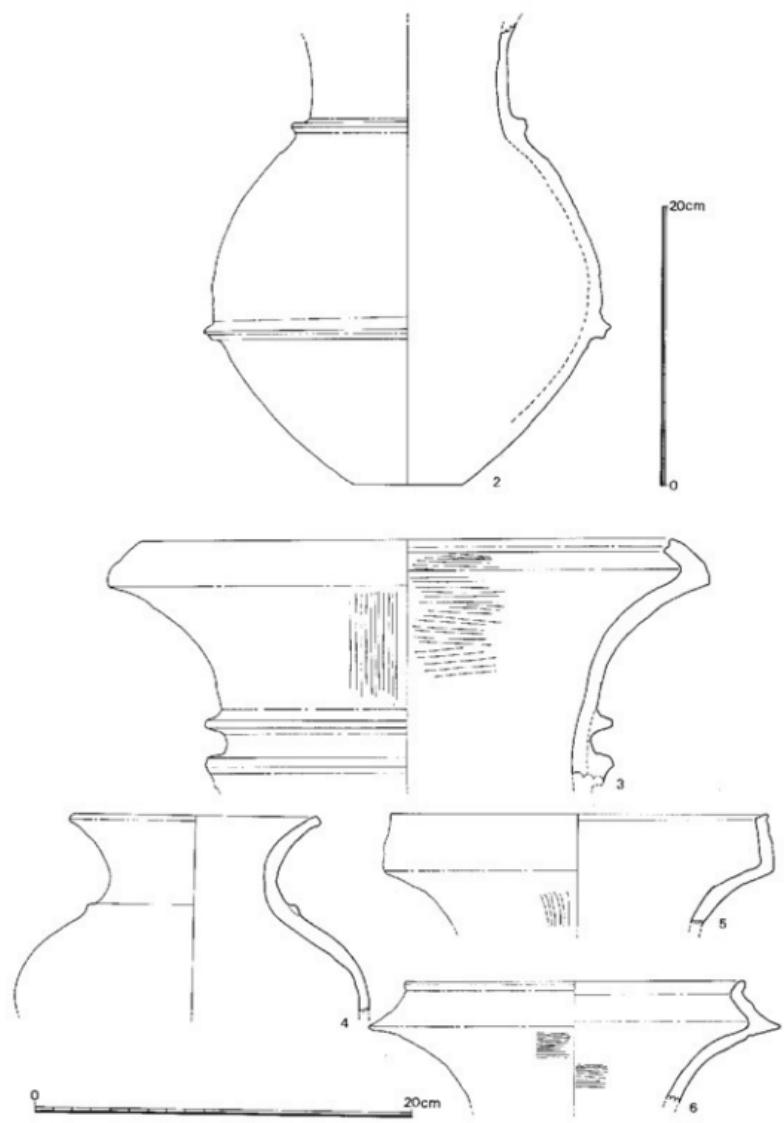
17・**18**は鉢である。**17**は復原口径21.0cm、残存器高13.2cmある。張りのある肩部から、口縁部が短く屈曲する。器面が荒れており、調整を判別できない。色調は赤褐色で、一部黒斑も見られる。胎土には小さな砂粒を多く含んでいる。**18**は口径14.1cm、器高8.4cmである。底部は凸レンズ状の平底で、そのまま口縁部につながる。口唇部にはヨコナデによるつまみ出しがある。また、刷毛目の痕跡が認められる。色調は茶褐色をなし、一部黒斑も見られる。胎土には石英の小さな粒子を多く含んでいる。

19は高杯である。復原口径36.0cm、残存器高8.0cmである。屈曲部が明瞭な稜線をもたず、口縁部は内湾して長く伸びる。器面が荒れているが、2種類の刷毛目が判別できる。色調は外面

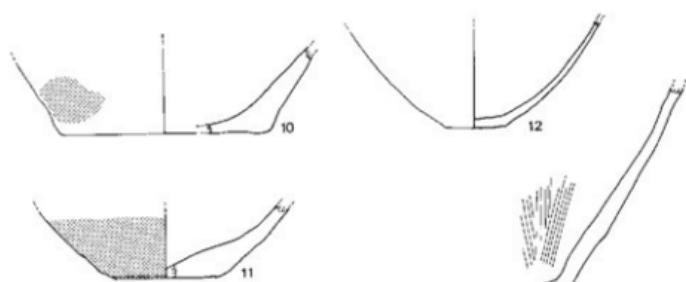
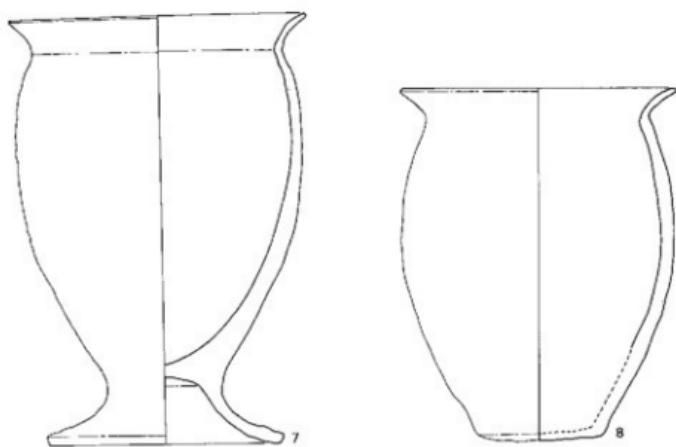
が茶褐色をなし、口縁部には一部黒斑も見られる。内面は主に茶褐色で、一部赤褐色の部分が見られる。胎土には細かい粒子を含んでいる。



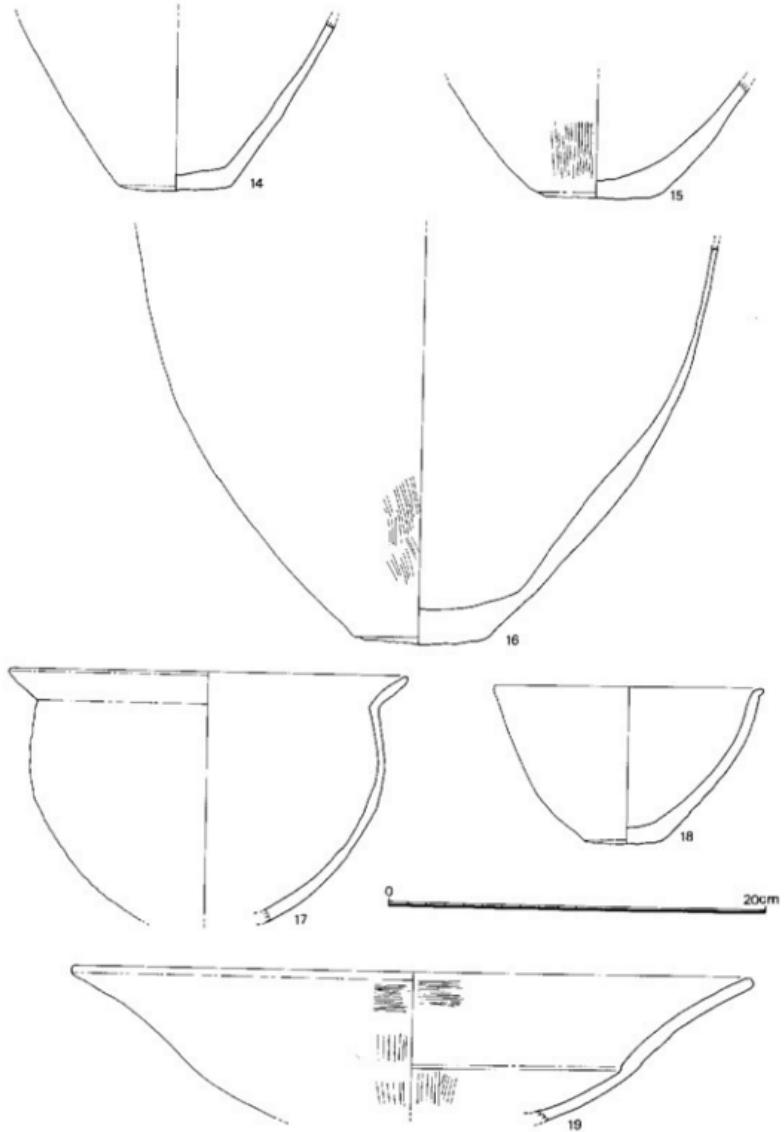
第29図 3号溝出土遺物(1)



第30図 3号溝出土遺物(2)



第31圖 3號墓出土遺物(3)



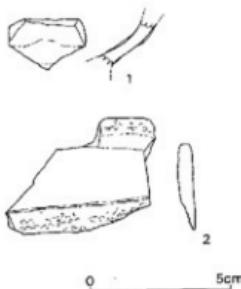
第32図 3号溝出土遺物(4)

その他の出土遺物（第33図）

1は第2層出土の天目茶碗の下半部小片である。内外とも、暗褐色の天目釉がかかり、外面は釉だまりがある。胎土は、やや黄色みを帯びて粗い。美濃瀬戸系の天目茶碗で、16世紀代のものと考えられる。

2は第1層より出土。磨製石剣の木製品を利用して作った石包丁と考えられる。刃部長が約3.5cmあり、反対側の刃部に刃つぶしを施したうえにつまみを作り出す。

また、図化はしていないが、3号溝から青銅製の鍔先や鉄製の鍔先の一部が出土している。



第33図 その他の出土遺物

(4) 小 結

第2地点の調査では、狭い調査区にもかかわらず多くの弥生土器が出土した。具体的には弥生中期の土器から土師器まで見られるが、主体をなすのは後期の土器であり、その多くは、切り合い関係のある溝の中から出土している。しかし、後期の土器も前半から終末まで及んでおり、2条の溝の正確な時期を把握することはできない。

3. 第3地点の調査概要

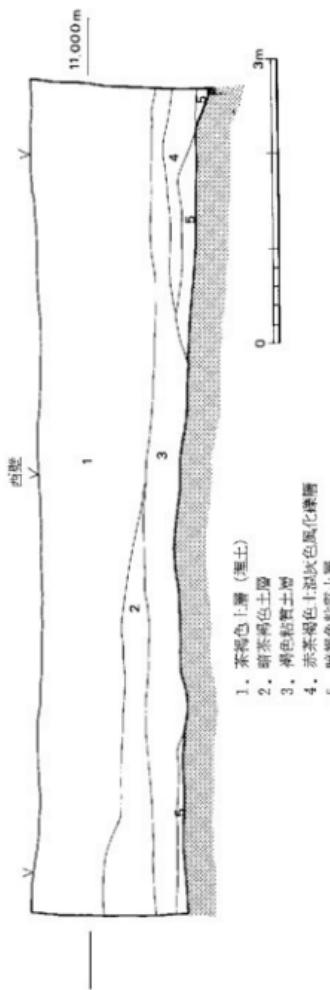
調査にあたっては復旧工事予定箇所の杭を基準に、長さ約9m、幅約4mにわたりて調査区を設定した。作業能率を考えて、崩落した斜面の土砂の表土部分だけをユンボで除去し、以下の部分について発掘調査を実施した。

(1) 土層 (第35図)

土層は基本的には5層に大別できる。第1層は耕地造成に伴う埋土で、厚さ約0.7~1.3m。第2層は暗茶褐色土層で、厚さ約0.3~0.5m。第3層は褐色粘質土層で、厚さ約0.3m前後。第4層赤茶褐色土が混入する灰色風化疊層。第5層は第3層に似るが暗褐色粘質土層である。遺物が出土したのは第1・2層で、その他の層での遺物の出土はなかった。



第34図 調査区域図



第35图 土壤剖面图

IV 総 括

今回の調査は、丘陵縁辺部としては昭和55年の調査に次ぐものであり、調査面積にすると約2倍になる。

調査の結果第1地点においては、弥生時代中期と後期の包含層がそれぞれ確認され、傾斜地という制約にもかかわらず、層位的な遺物の取り上げが行われた。第2地点においては、2条の溝を確認し、中から弥生時代後期を中心とした土器が多數出土した。しかし、必ずしも層位的な遺物取り上げが行われたとは言えない。また、2条の溝については、昭和50～52年の範囲確認調査でも発見されていることから、その関連性が注目される。第3地点では、包含層を確認することができなかった。

原の辻遺跡が、弥生時代の大規模な遺跡として初めて注目されるのは、大正15年の松本友雄氏の「壱州考古録 第1編」による。さらに、昭和14年には耕地整理が行われた際、旧制県立壱岐中学校に在職中の鶴田忠正氏により、層位的な観察が行われた。その成果が昭和19年に発表されている。

戦後になると、昭和23～26年にかけて東亞考古学会の調査が行われ、重要な遺跡であることが認識された。また、昭和26年・28年の九学会の調査では、鶴田氏の調査成果と比較したうえで、広義の高三層式の前段階を原の辻上層式とする考えが示された。原の辻上層式の編年上の位置付けについては、その後高倉洋彰氏により再検討がなされている。

昭和49年には、開発工事に伴い大原地区で大規模な墓地が発見され、県教育委員会による緊急発掘調査が実施された。また、今後もこのような開発行為が予想されることから、県教育委員会では、昭和50～52年にかけて範囲確認調査を実施し、多くの成果を上げた。

平成4年には、橋鉢川流域の圃場整備事業に伴い、原の辻遺跡を含む台地周辺の範囲確認調査が実施された。この調査では、原の辻遺跡に關係すると思われる溝状遺構や柱穴群などが確認されており、その成果の発表が注目される。

図 版

図版 1



遺跡空中写真



遺跡遠景（北から）

図版 2



第Ⅰ地点遺跡遠景西から



第Ⅰ地点近景

圖版 3

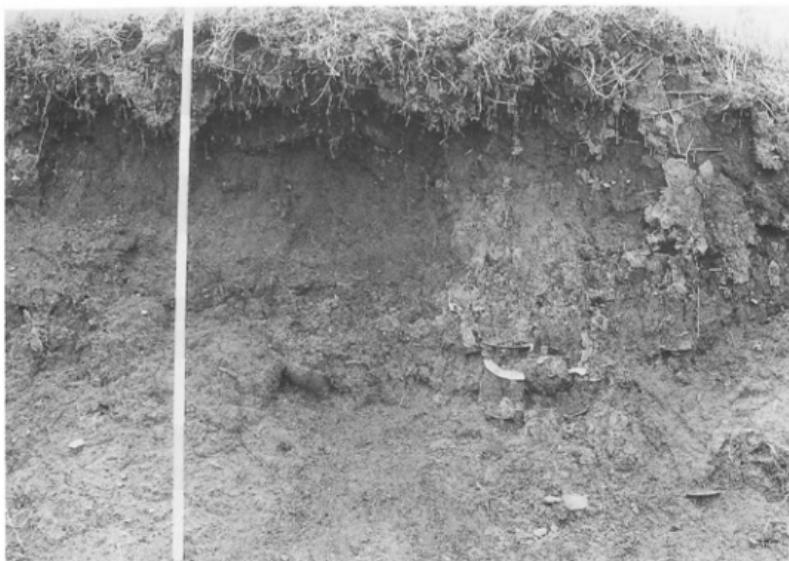


第Ⅰ地点調査風景



第Ⅰ地点遺物出土状況

図版 4



第 I 地点崩落の状況



第 I 地点南側土層

图版 5

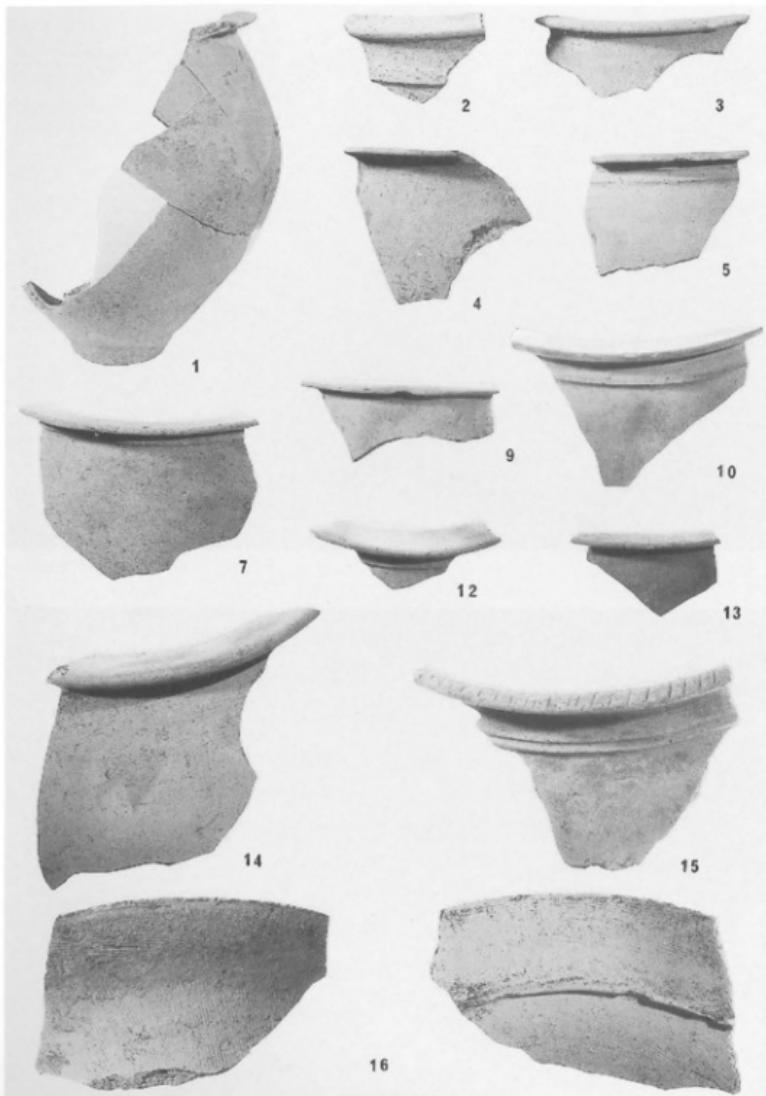


第 I 地点遗物出土状况



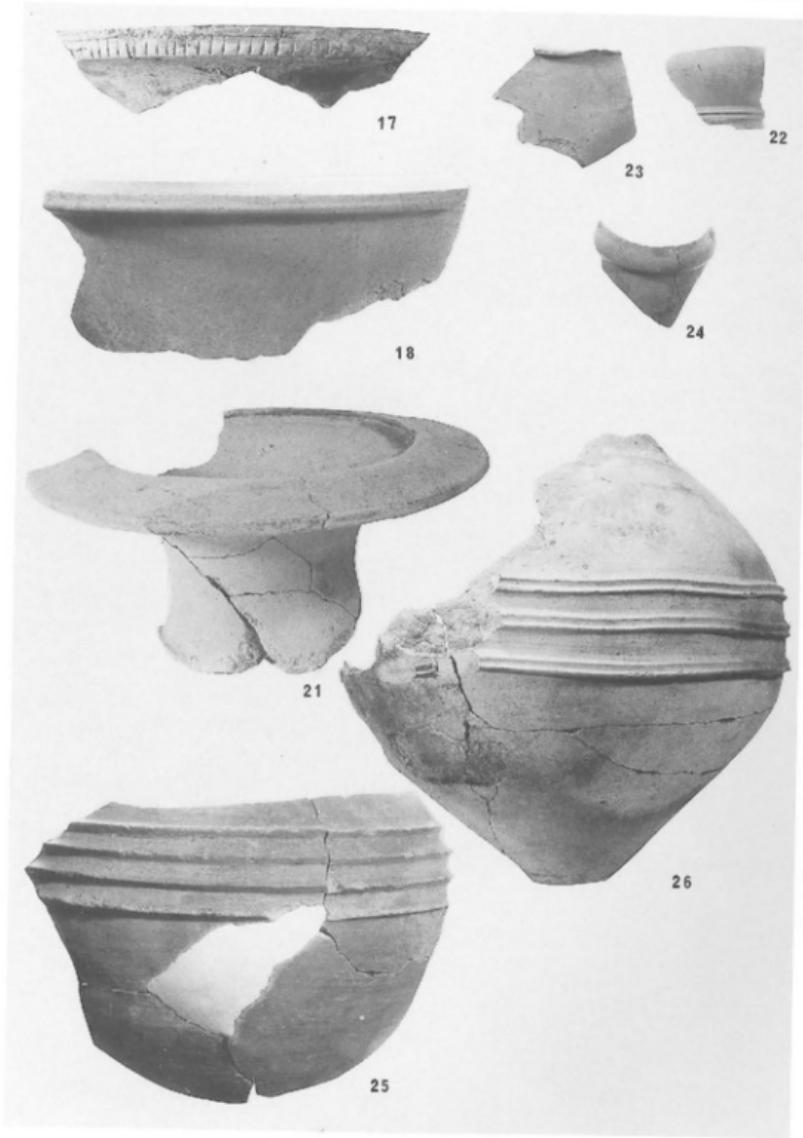
第 I 地点遗物出土状况

图版 6



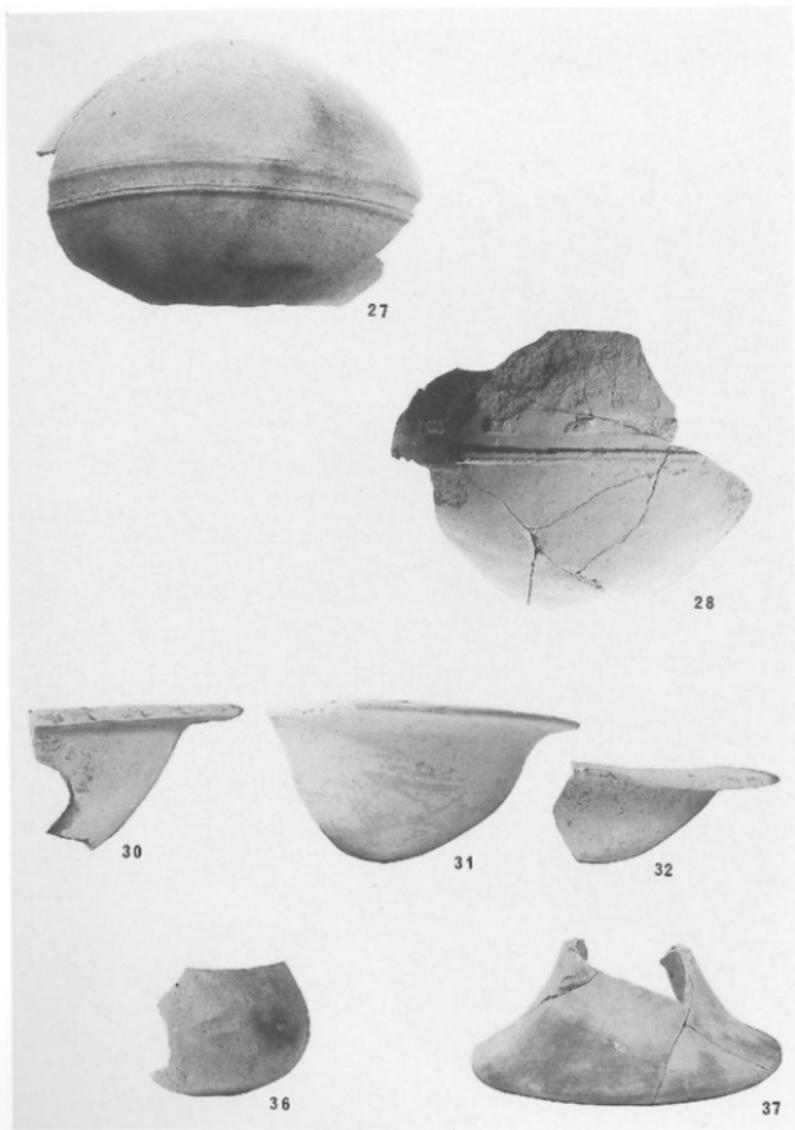
第 1 地点出土遗物(I)

図版 7

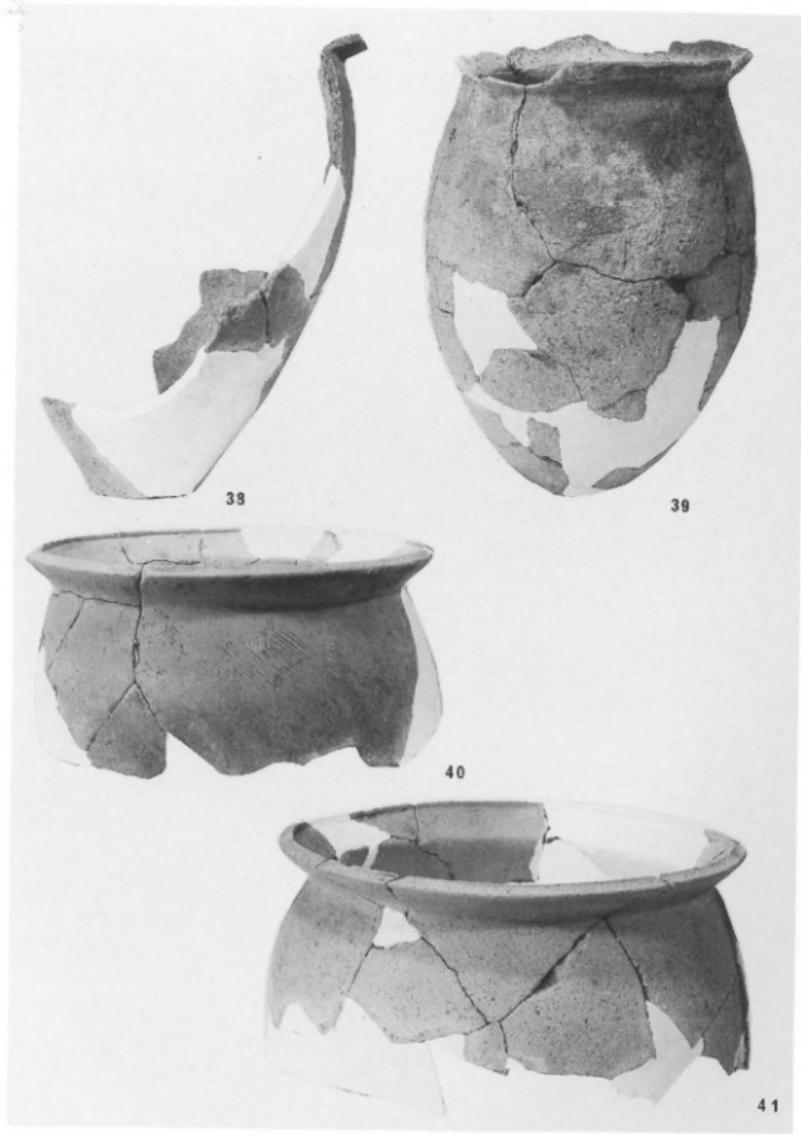


第Ⅰ地点出土遺物(2)

圖版 8

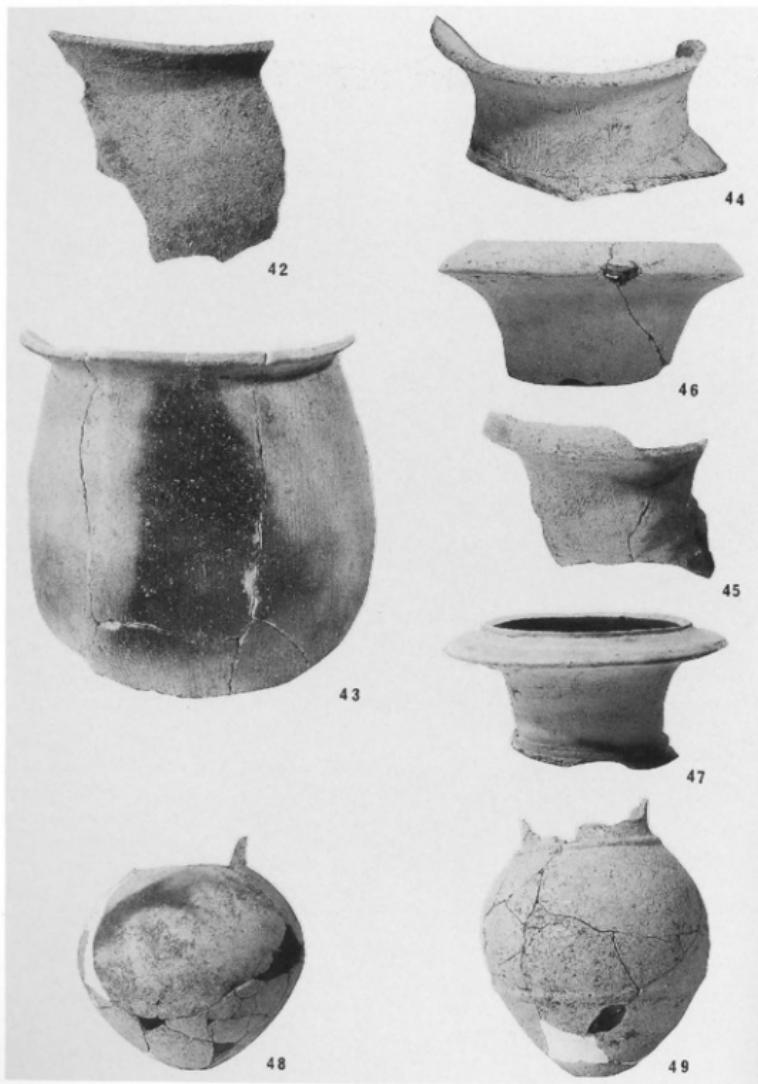


第 1 地點出土遺物(3)



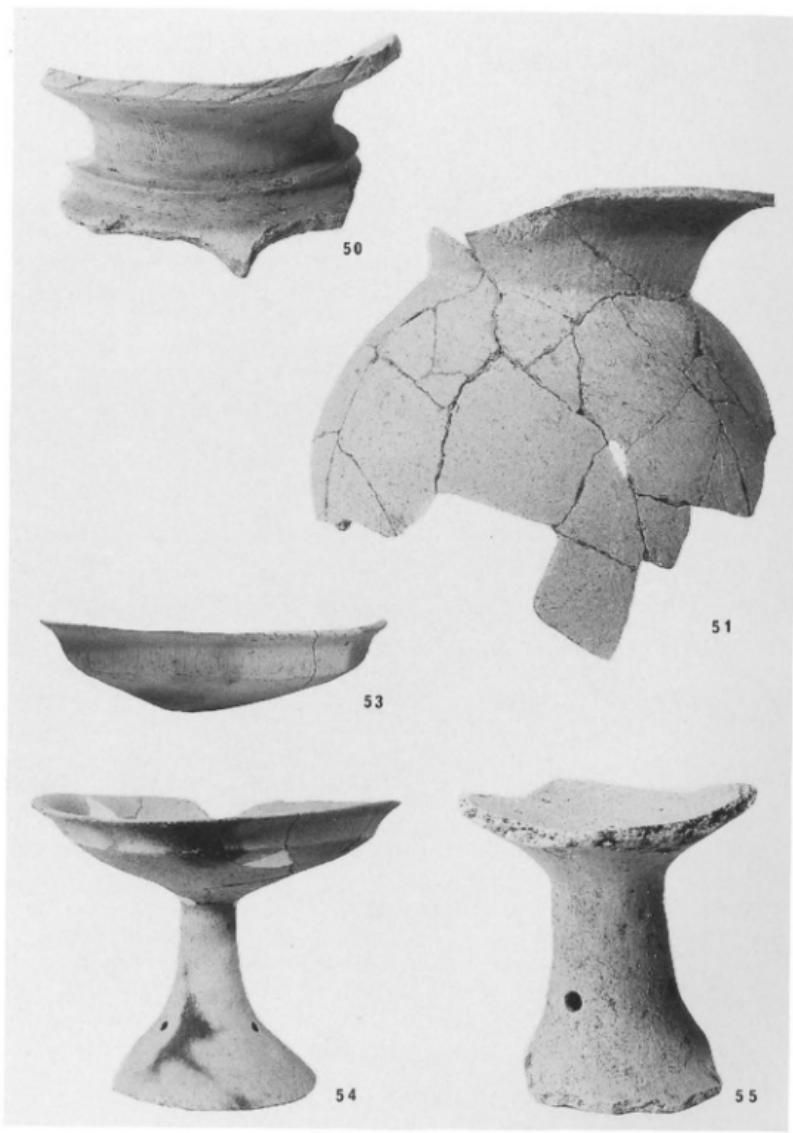
第1地点出土遺物(4)

图版10



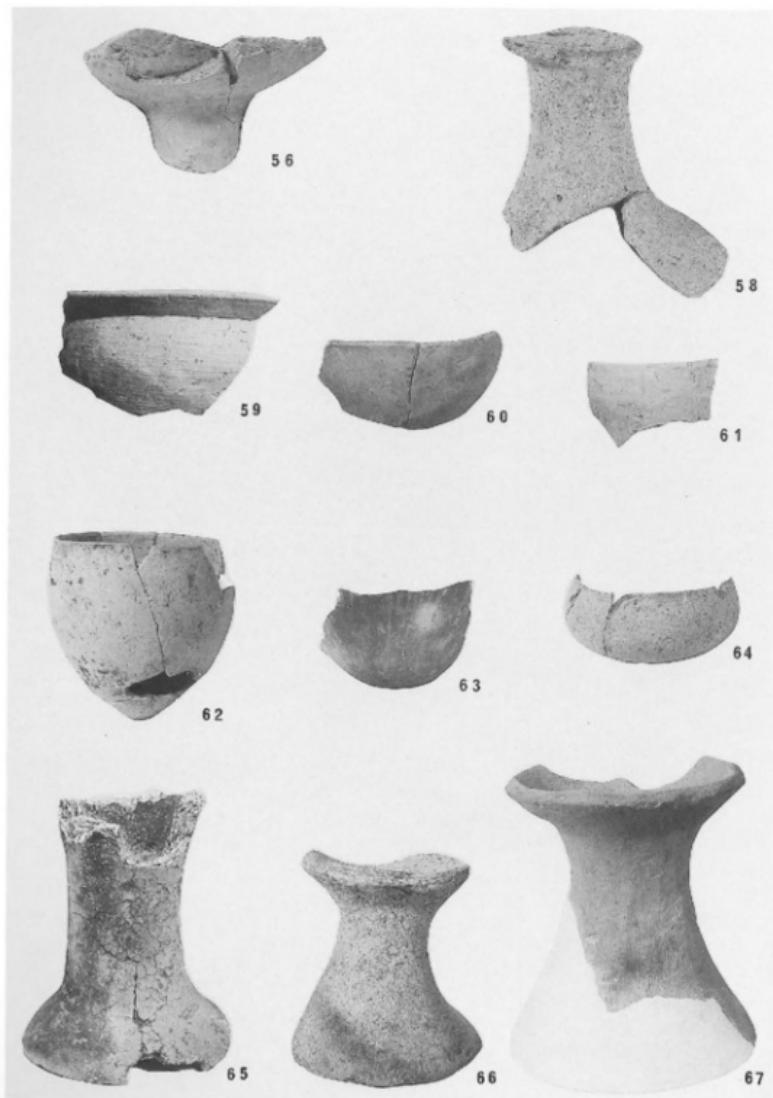
第1地点出土遗物(5)

图版11

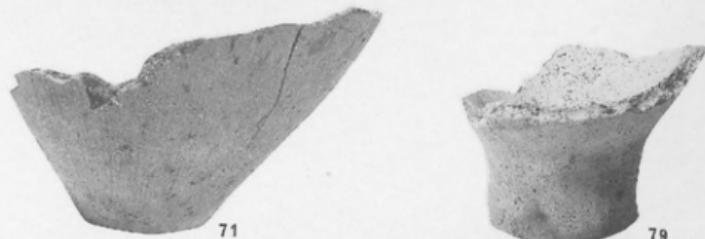
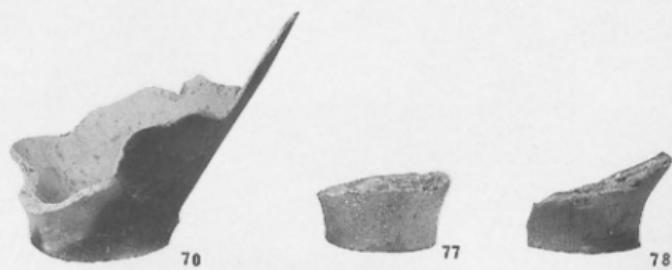


第1地点出土遗物(6)

图版12

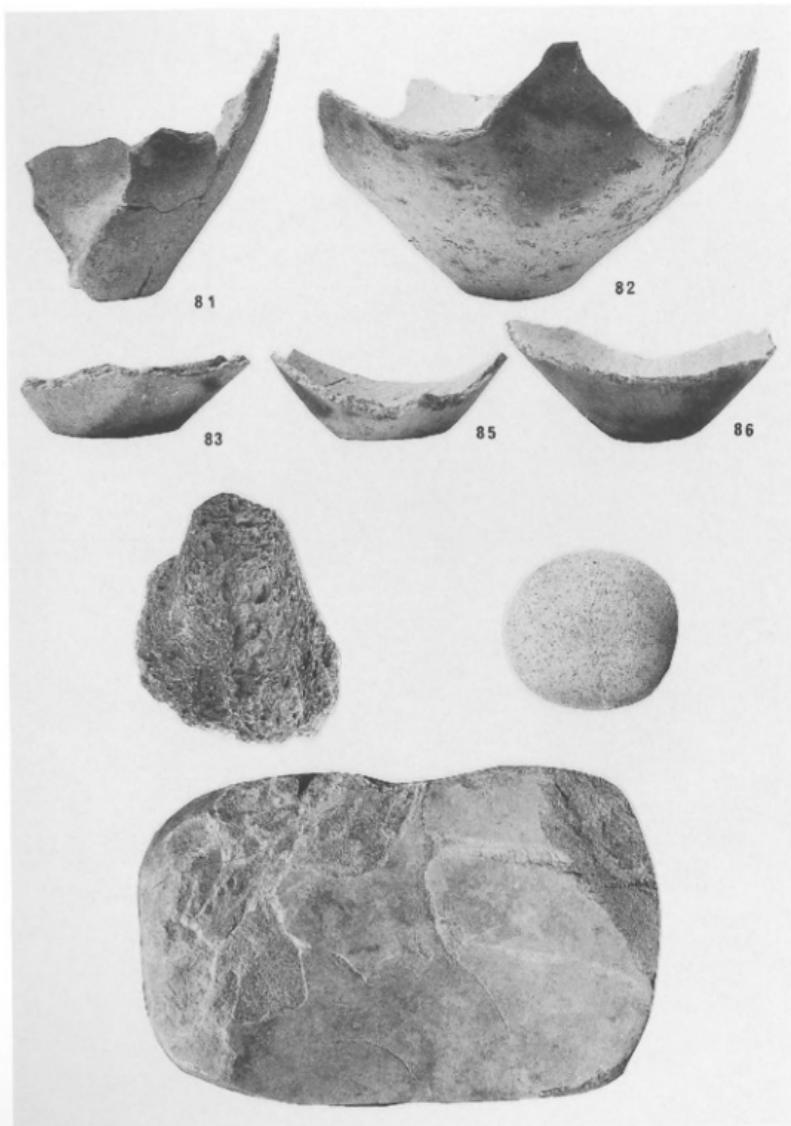


第1地点出土遗物(7)



第1地点出土遺物(8)

図版14



第Ⅰ地点出土遺物(9)



第2地点近景



第2地点調査風景

图版16



第2地点南侧土层



第2地点北侧土层

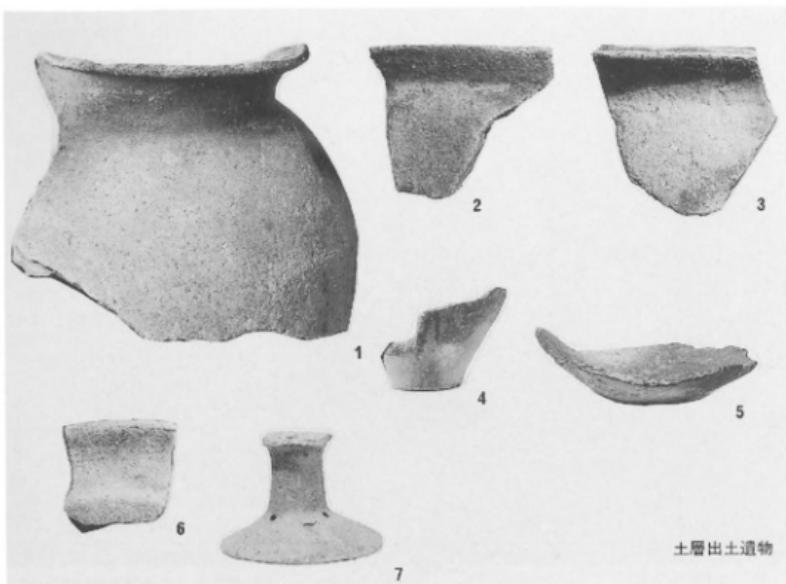


第2地点2号溝遺物出土状況



第2地点3号溝遺物出土状況

図版18

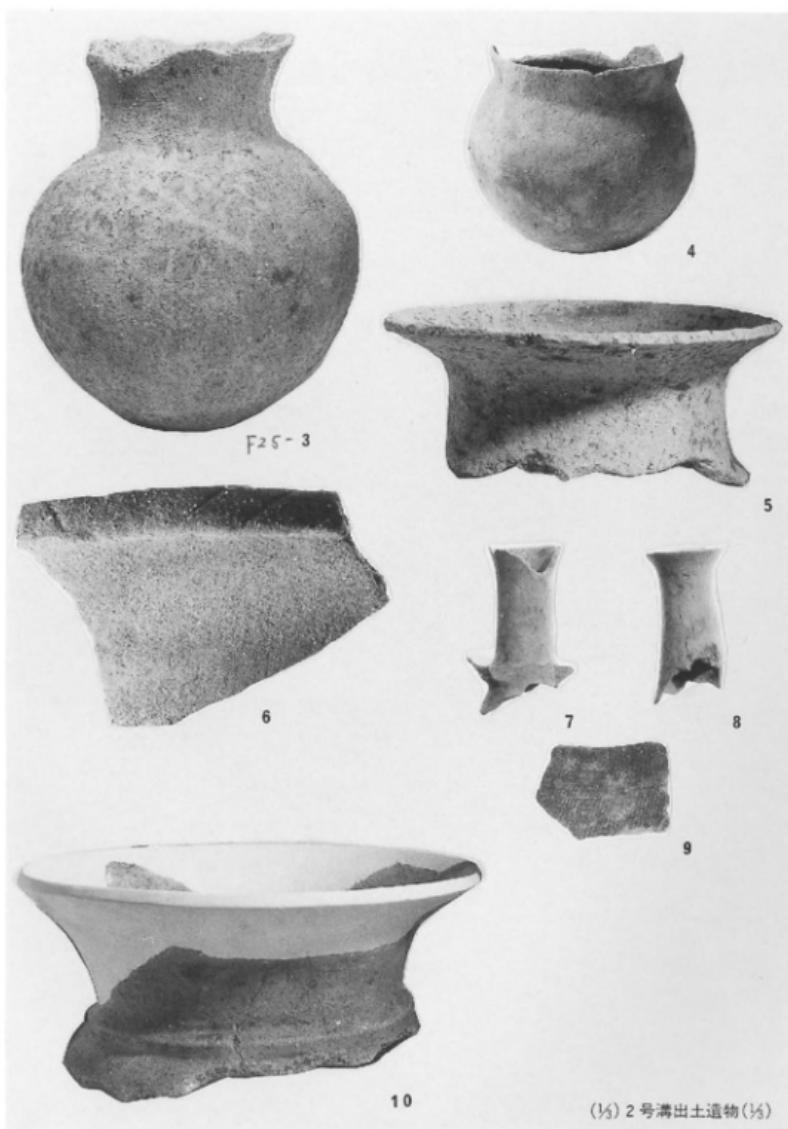


土層出土遺物



2号溝出土遺物(1)

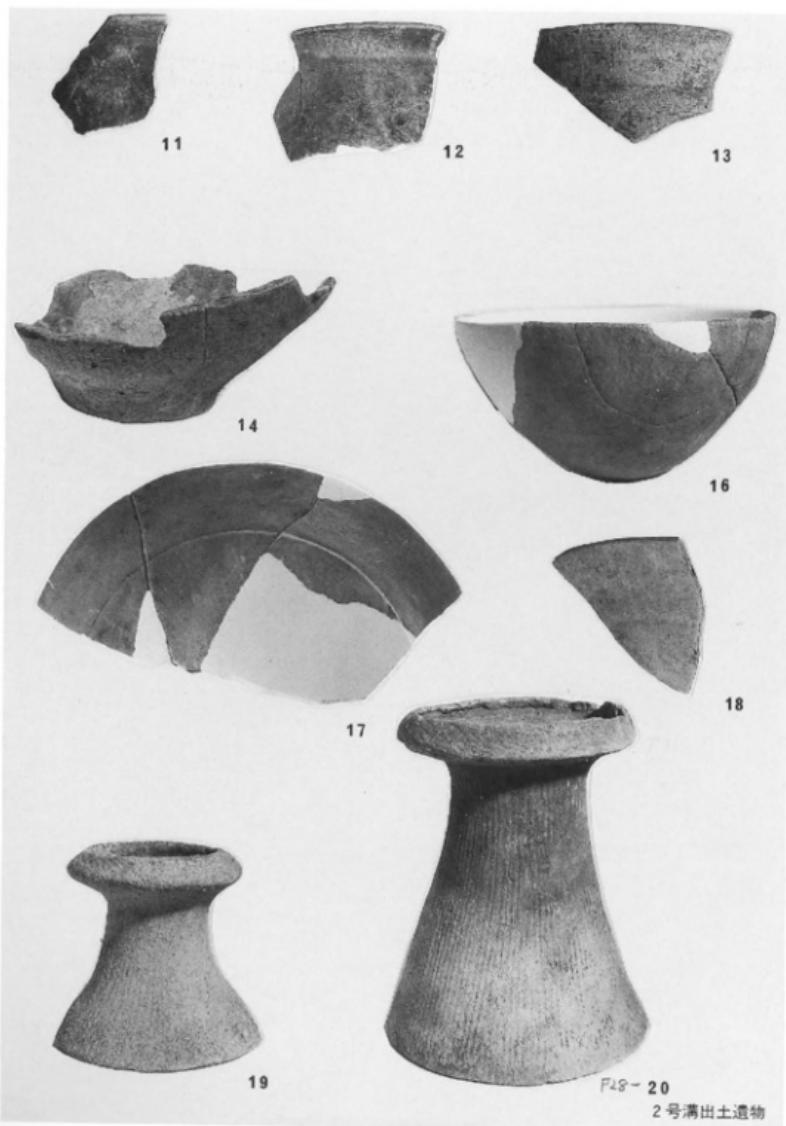
第2地点出土遺物(1)



(三) 2号溝出土遺物(三)

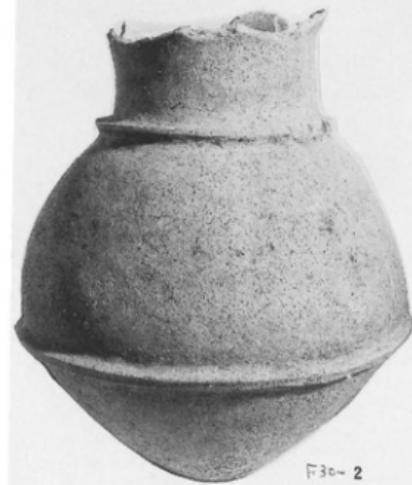
第2地点出土遗物(2)

図版20



F48-20
2号溝出土遺物

第2地点出土遺物(3)

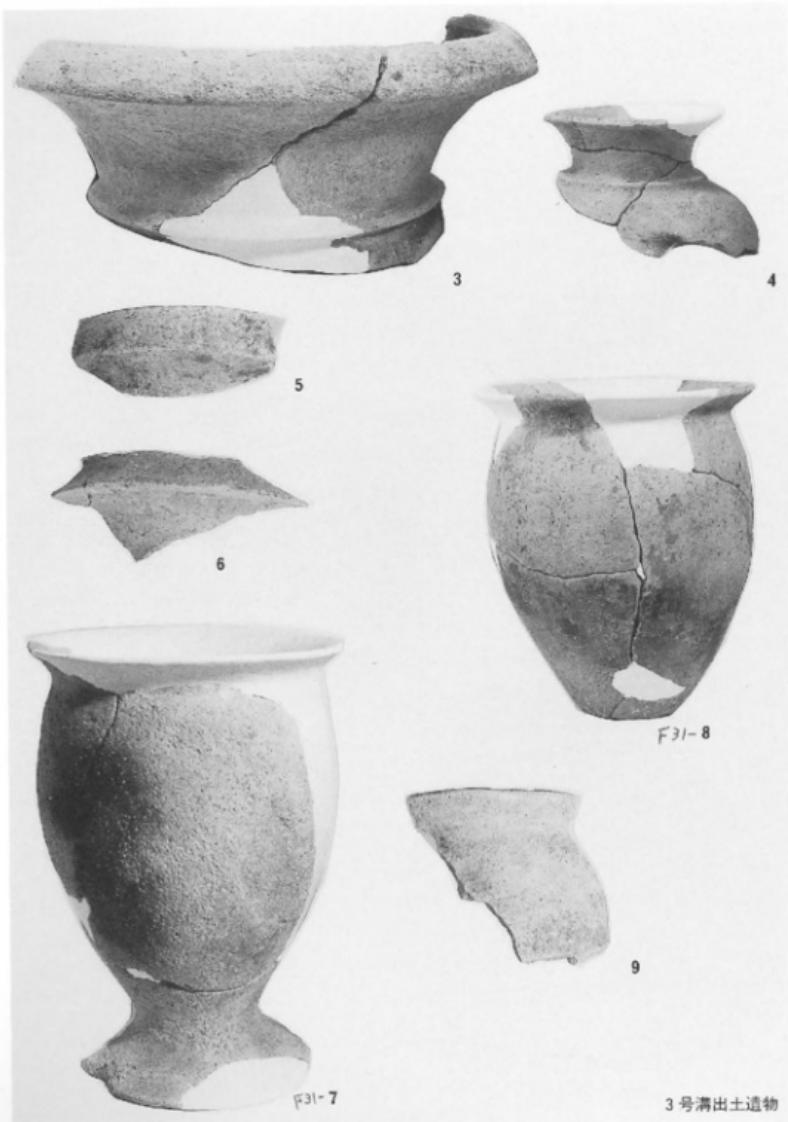


F30- 2

第2地点出土遗物(4)

3号溝出土遺物(1/4)

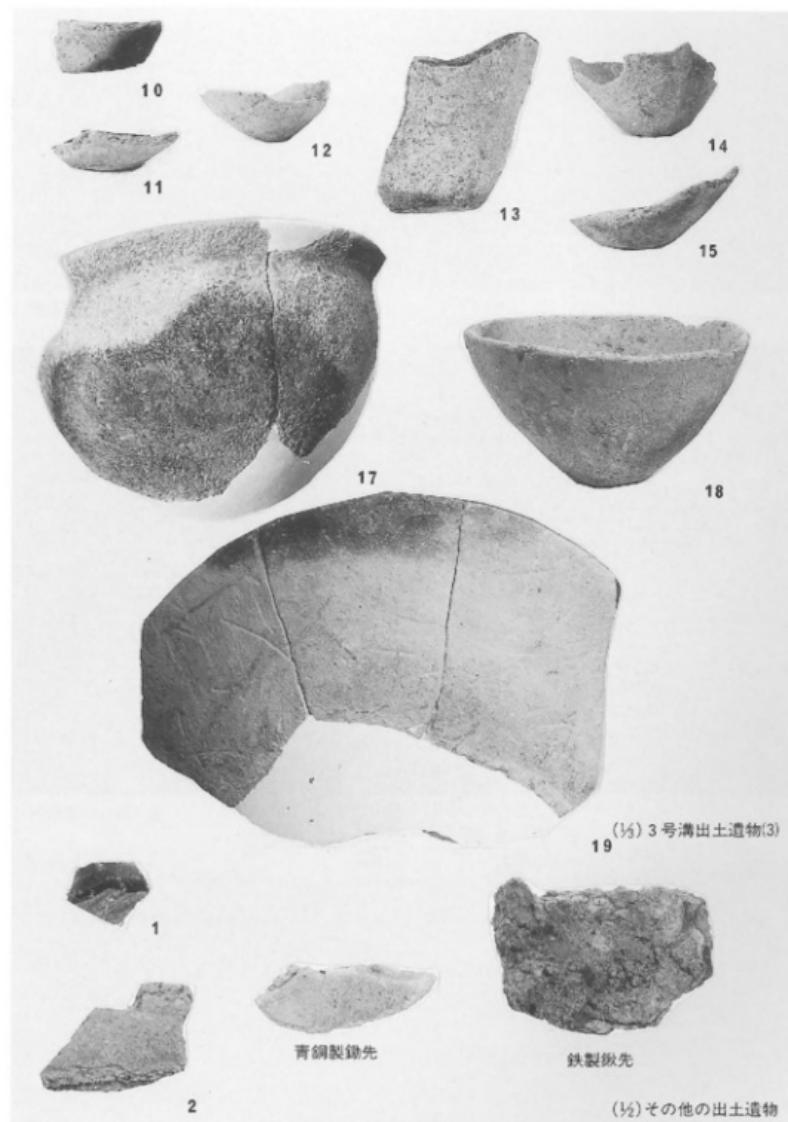
図版22



第2地点出土遺物(5)

3号溝出土遺物

図版23



第2地点出土遺物(6)

圖版24



第3地点近景



第3地点調査風景



第3地点北側土層

長崎県芦辺町文化財調査報告書第6集
原の辻遺跡

平成5年(1993) 3月31日発行

発行者 芦辺町教育委員会
壱岐都芦辺町芦辺浦562番地
〒811-53 ☎09204-5-1111

印刷所 昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
〒854 ☎0957-22-6000
